

教育協力のための拠点システム

平成16年度国際教育協力シンポジウム

開発途上国における 現職派遣教員の活躍 報告書

主催：文部科学省、筑波大学教育開発国際協力研究センター
協力：独立行政法人国際協力機構

平成17年2月

筑波大学教育開発国際協力センター(CRICED)
派遣現職教員支援課題

はじめに

文部科学省による青年海外協力隊への現職教員特別参加制度は、平成 14 年度派遣隊員から実施されました。本シンポジウムは、現職教員特別参加制度による派遣としては第一期に相当する平成 14 年度派遣現職教員の平成 16 年度帰国報告と、今後の本制度の推進のあり方を検討するために開催致しました。

シンポジウムの成果として報告書を通して皆様に広くお知らせしたいことの第 1 は、派遣現職教員が任国において、派遣現職教員の名を馳せるすばらしい活躍をしていることです。お知らせしたいことの第 2 は、帰国隊員の優れた教育協力経験は、日本の学校教育を改善する大きな力となることが、シンポジウムを通して確認されたことです。そして、お知らせしたいことの第 3 は、その優れた経験は、周囲関係者の理解のもとで内外に還元する機会を得てこそ意味をなすということです。

幸いにも、各都道府県・政令指定都市教育委員会は、近年、海外夢大使制度をはじめとした諸制度を次第に整備しつつあり、派遣される隊員を郷土の宝とみなすなど派遣現職教員の活躍の場を増やそうとする動きが高まっています。本シンポジウムを主催した文部科学省においても、平成 14 年 7 月の国際協力懇談会による答申を受けて、平成 15 年度より教育協力のための拠点システム事業・派遣現職教員課題を開始しました。本シンポジウムは、そのような高まりのもとで開催したものです。

シンポジウムは三部で構成しました。開式に際しては、主催者である文部科学省より井上正幸統轄官、協力者である独立行政法人国際協力機構からは松岡和久理事よりご挨拶がありました。第 1 部では、帰国現職教員の活躍を、6 名の先生方の具体的な体験談を通して明らかにしました。第 2 部では、任国で活躍する現職隊員と帰国教員とがいかに関日本の教育に貢献しえるか、インターネットライブ授業を例に検討しました。第 3 部では、派遣する側から 3 名（文部科学省・教育委員会・青年海外協力隊）、派遣された側から 2 名（青年海外協力隊派遣、専門家として派遣）によるパネル・ディスカッションを持ちました。本報告書は、それらの概要を収めています。

末筆ながら、シンポジウムを実施した文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室、つくば大学教育開発国際協力研究センターのもと、多大なご協力を下された独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局、そして日本中から集まった 152 名の参加者にお礼申し上げますとともに、今後も派遣され帰国する現職教員支援の輪を、本報告書の読者とともに広げていくことができたいへん幸いです。皆様からのご提案をお待ち申し上げます。

平成 17 年 2 月 1 日

拠点システム構築委託事業派遣現職教員支援課題

代表者 磯田正美

目次

主催者挨拶	井上正幸 文部科学省国際統括官	1
-------	-----------------	---

来賓挨拶	松岡和久 独立行政法人国際協力機構理事	3
------	---------------------	---

第1部 派遣現職教員の活躍（報告）（10時15分-12時30分）

—派遣現職教員は任地でどのような活躍をしているのか—

エクアドルでの小学校教育

横山かおり 小学校教諭・浦安市立北部小学校教諭	7
-------------------------	---

ザンビアでの理数教育

藤東喜史 理数科・福島県立いわき光洋高等学校教諭	16
--------------------------	----

セネガルでの家政教育

横山真智子 家政・各務原市立鶴沼第二小学校教諭	24
-------------------------	----

パラグアイでの音楽教育

谷花邦博 音楽・広島市立井口中学校教諭	29
---------------------	----

ブルガリアの美術教育

佐藤雪絵 美術・茂原市立南中学校教諭	32
--------------------	----

昼食（12時30分-13時30分）

第2部 国内と途上国をつなぐ帰国隊員の活躍（13時30分-14時10分）

—現職教員派遣は我が国の教育の改善にどのように貢献するのか—

カンボジアバタンバン州ワットカンペイン小学校—長野県小諸市立美南ガ丘小学校に おけるインターネットライブ授業

中山晴美 小諸市立美南ガ丘小学校教諭	37
--------------------	----

総評 国内と途上国をつなぐ帰国隊員の活躍

上原吉雄 小諸市立美南ガ丘小学校長	47
-------------------	----

第3部 現職派遣の意義と課題：パネル・ディスカッション（14時30分-16時50分）

—やりがいのある現職派遣制度を作るために—

モデレータからの問題提起

磯田正美 筑波大学教育開発国際協力研究センター	49
-------------------------	----

文部科学省の取り組み

野田潔 文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室長補佐	50
----------------------------	----

JOCV 事務局による推進体制

大塚正明 国際協力機構青年海外協力隊事務局長 53

横浜市における青年海外協力隊派遣の取り組み

大野敏美 横浜市教育委員会教職員人事課長 54

派遣現職教員として参加して

浅香信之 かほく市立宇ノ気小学校教諭 55

現職教員の専門家としての可能性

高橋進 都立白鷗高等学校教諭 57

ディスカッション要旨 58

閉会挨拶 中田英雄 筑波大学教育開発国際協力センター長 65

資料

1. 派遣現職教員支援課題の概要 66

2. 教育新聞記事（平成 17 年 1 月 13 日付） 67

3. 日本教育新聞記事（平成 17 年 1 月 21 日付） 68

4. 速報つくば記事（平成 17 年 1 月 26 日付） 69

5. シンポジウム案内 70



主催者挨拶

井上正幸
(文部科学省国際統括官)

本日は、皆様方におかれましては、ご多忙な中、文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウムにご出席いただき、また、平素から開発途上国への国際教育協力の推進にご協力いただき、御礼申し上げます。

1954年に我が国がコロンボ計画へ加盟して以来、これまでに、インフラの整備から保健・医療に至るまで、幅広い分野においてODAを実施してきましたが、とりわけ、人間の一生を通じて、人格形成と、人権、環境、経済産業等のあらゆる領域の基盤を形成する教育は、開発途上国が自らの努力によって貧困から脱出し持続的に発展していくための基盤づくりに大きな役割を果たすための最重要分野です。なかでも、初等中等教育分野の協力重視は、世界的な潮流となっており、我が国としても開発途上国の自助努力を促しつつ、国際教育協力を促進する重要性がますます高まっているところです。

このような動きを踏まえ、文部科学省では、開発途上国を支援するため、我が国の経験と人材を活かした国際教育協力の取り組みを進めています。その大きな柱の一つとして進めているのが、青年海外協力隊「現職教員特別参加制度」です。

現職教員は、指導案の作成、教材開発、各種技術指導など、児童・生徒に密着した実践的な教育経験や能力を有しています。このような人的資源を積極的に活用することによって、我が国の教育経験を活かし、開発途上国に対する効果的な教育支援を実現するのが同制度の目的の一つです。さらに、これらの教員が開発途上国において国際教育協力に従事することによって、コミュニケーション・異文化理解の能力を身につけ、国際化のための素養を児童・生徒に波及的に広めることや、帰国後に自身の経験を教育現場に還元することを通じ、将来の国際教育協力分野の人材の裾野を広げるのみならず我が国の教育の質を高める効果も期待できます。

制度創設以来の3年間で183名の現職教員が世界各地に派遣され活躍しています。来年度には、84名が新たに派遣されることになっています。

また、文部科学省では、平成15年度より途上国に対する初等中等教育分野等の協力強化を目的とした拠点システム事業に取り組んでいます。その中で、筑波大学を拠点に青年海外協力隊で派遣される教員の方々に対する事前研修や、派遣期間中における専門的な相談、助言、帰国した教員の任地における協力経験を集約、体系化するなど、現職教員への支援を強化しているところです。派遣される教員の方々には心強い味方であると考えております。

このような協力活動を通じて、開発途上国と我が国の国民の共生を深めていくという意義は極めて大きいものです。文部科学省としては、今後も、我が国の経験と人材を活かした効果的な国際教育協力に取り組んでいきます。また、皆様方におかれましても、当シンポジウムが国際教育協力を取り組む上での一助になることを願ってやみません。

最後に、本日のシンポジウムが、皆様方の、教員、行政、勤務地等、様々な職種、領域を超えたネットワーク構築のきっかけとなるとともに、更に多くの現職教員の派遣につながることを願いつつ、また、皆様方のこれからますますのご活躍を祈念いたしまして私の挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。



来賓挨拶

松 岡 和 久

(独立行政法人国際協力機構理事)

只今、ご紹介戴きました JICA の松岡です。本日は本シンポジウムの協力者の代表として、一言ご挨拶申し上げます。

皆様ご存知の、青年海外協力隊は来年 40 周年を迎えますが、昭和 40 年の発足以来、78 カ国に 26,000 人を超える隊員を発展途上国に送り出してきており、草の根レベルで、住民に直接届く国際協力の実施を通じ当該国の経済・社会の発展や、わが国との友好親善に貢献して参りました。

この間、過去約 1,000 名近くにも及ぶ現職教員の派遣を行なって参りましたが、この経験から、現職教員の派遣は当該国への直接的効果に加え、教員本人の資質の向上や、派遣中や帰国後の生徒に対する国際理解・開発教育に関する教育の推進に資するということが、文部科学省・各県の教育委員会関係者の中で強く認識されるようになり、平成 13 年度より、現職教員からの募集を一般の公募から切り離れた形で制度化し、派遣人数も過去の実績の 3-4 倍にあたる年間 100 名規模に拡大すると共に、参加促進し易い環境整備として、4 月の教員の人事ローテーションに見合うような派遣期間を導入することとして出来たのが、この現職教員特別参加制度であります。そして、この制度によって平成 14 年度以降、3 年間で計 183 名の先生方を海外に派遣することができました。

その一期生として 63 名の先生方が、平成 14 年 4 月より平成 16 年 3 月末までの 2 年間の任期で、内 3 ヶ月の国内訓練と 1 年 9 ヶ月の現地活動を体験し、昨年 3 月末帰国されたわけでございます。長年に亘る青年海外協力隊事業の歴史中で、かかる特別制度を設けたことは、JICA 始まって以来のことですので、この先生方の様々なご体験や感想を伺いたく、私自身も十数名の方々とその上司の方々と直接お会いし、この制度のレビューを開始していたところ、今回、このようなシンポジウムを開催して戴き、非常に喜んでいる次第でございます。

改めて、本シンポジウムの開催にご尽力された文部科学省、筑波大学教育開発協力研究センター、協力隊員 OB/OG 並びに、その他関係者の方々に対し、深く御礼申し上げます。

さて、皆様、世界には日本の人口に匹敵する 1 億 2000 万人もの未就学児童が存在し、8 億 7000 万人もの成人非識字者がいることをご存知のことと思います。そして、2015 年までにこの数字をゼロにすることがミレニアム開発目標として国際社会の中で確認されていることをご存知のことと思います。従って、途上国における教育分野のニーズは近年非常に高まっており、JICA の事業予算の 20%が教育分野に配分されています。特に、協力隊員が派遣されている国の多くで、基礎教育の充実や教員の質の向上など教育分野を国別の重点課題として掲げており、派遣中の協力隊員の約 40%にあたる約 960 名が教育系の職種で活動しています。

特に、教育現場や教員育成学校での隊員の活動は高い実務経験が求められることから、経験豊かな現職の先生方への期待は非常に大きく、今後更に多くの方々の参加が望まれるところでもあります。

現に、私ども JICA では、この 7 年間で 11%もの予算が削減され、財政事情は非常に厳しい状況にはありますが、17 年度、18 年度の 2 年間で協力隊は、世界で最も厳しい状況にあるアフリカを中心に約 200 名の増を図り、その 3 分の 1 は教育分野に配分する計画でおります。

教員が授業やクラス活動を通じて日々生徒たちと接することを考えますと、教員の協力隊への参加は、ボランティア活動期間中及び帰国後に、その経験を日本社会へ還元するという観点からも非常に意義のあることだと言えます。総合学習の時間の導入により国際理解教育に関心が寄せられていますが、途上国での生活環境や習慣を理解し、現場を実際に体験した先生方が、日本の教育現場で活躍することで、国際感覚を養い、多様な価値観に対応できる柔軟な人材の育成が図られ、ひいては、国際社会の平和と発展に貢献できる日本の建設に大いに寄与できることを期待しております。

現に、昨年の 3 月に帰国した現職参加教員のうち約 60%の方が、派遣中に日本で勤務していた学校と連携をして何らかの活動を実施したと報告しており、両国生徒間の文通活動や現地の様子を日本の子どもに伝える現地活動通信の発行、インターネットを使った授業交流など実にさまざまな工夫を凝らして取り組んだ様子が伝えられています。

私ども JICA もこうした先生方の派遣中並びに帰国後の貴重な体験の社会還元活動を支えるための方策として、JICA-NET という情報通信ネットワークを現在国内 11 箇所、海外 13 カ国に設置すると共に、更には、18 年度末までには全国内機関と 56 カ国との接続が可能となるよう施設整備を進めております。また、毎年研修で来日する 8000 名もの途上国の人々を各学校に派遣する用意もできており、彼らの活動を支援する体制を整えようとしております。

更には、17 年度より一年未満の短期ボランティア派遣制度の導入やシニア海外ボランティアと青年海外協力隊との組み合わせによるプログラム型の協力の導入などさまざま各種制度改革を実施しようとしております。

従いまして、本日は、実際に活動を終えて帰国された先生方からの報告や関係者によるパネル・ディスカッションを通じて、活発な議論が行なわれ、現職の先生方の協力隊参加の意義を改めて確認し、本制度の更なる発展・拡大に向けた改善策が提起されることを期待している次第でございます。

最後になりましたが、ホンジュラス、アフガニスタン、エチオピアにおける教育プロジェクト並びに現職教員特別参加制度に対する格別のご支援・ご協力を賜っており



ます、ここ筑波大学教育開発国際協力センター関係者の皆様のご厚情に対し改めて感謝申し上げますと共に本シンポジウムの成功を祈念いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。

第 1 部

派遣現職教員の活躍（報告）

—派遣現職教員は任地でどのような活躍をしているのか—

ここでは、平成 16 年 3 月に帰国した現職教員特別参加制度による初代隊員である以下の平成 14 年度派遣隊員の皆さんから、その活躍を報告いただきました。その報告は、1 月 13 日(木)付けの教育新聞でも報道されました(巻末資料参照)。

エクアドルでの小学校教育

小学校教諭・浦安市立北部小学校教諭 横山かおり

ザンビアでの理数教育

理数科・福島県立いわき光洋高等学校教諭 藤東喜史

セネガルでの家政教育

家政・各務原市立鶴沼第二小学校教諭 横山真智子

パラグアイでの音楽教育

音楽・広島市立井口中学校教諭 谷花邦博

ブルガリアの美術教育

美術・茂原市立南中学校教諭 佐藤雪絵

現職教員は、文部科学省による現職教員特別参加制度によって次のような仕組みによって派遣されます。まず、派遣前年度春に学校を通じて教育委員会に希望し、夏に面接と健康診断を中心とする試験を受けて、秋には結果を通知されます。合格した現職教員は、派遣年度の 4 月に青年海外協力隊訓練所に入所し、現地語等の研修を経て、7 月に晴れて任国に派遣され、翌年度の 3 月に帰国します。平成 14 年度派遣現職隊員は平成 16 年 3 月に帰国しました。現在、平成 15 年度派遣隊員、平成 16 年度派遣隊員が任国に派遣されています。

http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/genshoku/main6_a9.htm

エクアドルでの小学校教育

横山 かおり

(小学校教諭・浦安市立北部小学校教諭)

昨年、ある日の天声人語で協力隊が紹介されていました。その中に、人類学者、中根千枝さんが出した本の中の、「がんばりすぎると、落胆や不満も大きくなる」という一節が出ていました。私たち、現職教員の多くがこの言葉に納得してしまうのではないのでしょうか。さらに、「厳しい環境の下では、学歴や職業と関係なく、全人格的能力がおのずと現れる」とあり、まさにこのことが私の1年9ヶ月の活動の中で試されたことでもありました。

私が任地についた日は8月30日。ホームステイ先の家族に連れられて学校を見に行きました。学校はまだ、夏休み中で、玄関の脇の教室では住み込みの用務員さんがじゃがいもを干していました。本当にここで2週間後、授業が行われるのだろうか、というような散らかりようで、静かな衝撃が走りました。村に初めて入ったときもそうでした。村の光景を目にしたとき、どこか寂しい気持ちがしました。私は、この村で好きになるものは何かないかと一生懸命に探したことを今でもよく覚えています。

第一印象はとても大事だと思います。私は、一度抱いてしまったこの寂しい気持ちと以後、戦っていかねばなりませんでした。

最初の職員会議は、給食を食べながら行われました。まず、今年1年どんな行事をするか、の確認でした。もちろん、スペイン語で、ナチュラルスピードで、私がまだ、言葉になれていないという認識は先生方の中にまったくありませんでした。行事の名称は初めてのものばかりで、なかなかイメージがわいてきませんでした。そして、次に担当が決められていきました。私の担当は、ヒデヨ・ノグチの誕生日に何かをやる、集会で音楽発表会をする、ことを必死に聞き取りました。でも、集会がいつ行われるのかはわかりませんでした。職員会議が終わると先生方は、わたしに声をかけることなく自分の教室に戻っていきました。

学校から要請があってから隊員が派遣されるまで、1年以上かかってしまうこともあり、その間に学校の事情が変わり、任地に到着したらすでに仕事がなかった、仕事の内容が要請内容と違っていた、などということもあります。同僚の先生方のどこか冷たい雰囲気一抹の不安を抱えながらも、仕事があってよかった、などと思ったことでした。

このあたりは、昨年春に行われた中南米地区の調整員会議で話し合われ、要請から派遣までの期間が短くなっていくだろうということでした。

さて、お手元の資料の1にあるように、ヒデヨ・ノグチ小学校は300人の中規模校ですが、1クラスの人数が50人前後のマンモスクラスでした。45分の中で、一人一人の子供が十分に学習活動を行えるような授業の組み立てをするのは至難の業でした。しかも、私は、音楽を8クラス、16時間、体育を8クラス、8時間受け持っていましたので、学年に応じたカリキュラムを立てなければなりませんでした。

さらに、このマンモスクラスの中に、肢体不自由児や、脳性まひの子供がいますから、体育では安全と障害児への配慮もしなくてはなりませんでした。

校庭はバスケットコート1つ分のコンクリートの中庭で、この中では大勢の子供の運動量が十分に確保出来ないと思い、ジョギングや陸上運動のときは、外にでて行っていました。ところが、外に出ると近くの店へ駄菓子を買に行ったり、どこかへ消えてしまう子供がいたり、さらに苦労が増えました。それでも、なんとか続けていましたが、ある日、子供とジョギングをしていた私は、犬に襲われて噛まれてしまいました。野良犬だったので狂犬病の注射を5本打つ羽目になりました。でも、子供が噛まれなくて良かったと思いました。エクアドルには野良犬が多くて、犬に噛まれた隊員が結構いるのです。

資料2に時程がのっています。日本と同じ45分授業です。ただし、4時間目だけが30分です。けれども、給食の朝食時間が延びて多くが消滅していました。国立の小学校では、豆やキヌアと呼ばれる穀物、お米、そして飲み物による給食がありました。多くの子どもが朝食はもちろん、普段も十分に食事をとっていないので栄養状態が悪く、国から給食の食材の一部が支給されていました。

校全体が時間にルーズで、定刻に子供が集まったことはありません。少しでも、子供たちに活動時間を確保しようと活動案を工夫しても、それを実行できませんでした。時間が守られるのは、下校時刻だけでした。12:30にチャイムが鳴ると、たとえやっていることが途中で、教室を出て行ってしまいます。スクールバスの出る時間もあるので、こちらも授業時間を延ばすわけにはいかず、予定したことを消化できずに終わってしまうことがほとんどでした。

こんなことが毎日続くので、日に日にいやになっていくのですが、このいやになる気持ちと毎日戦っていかなければなりませんでした。最初に述べた「人格」が日々試されていたわけです。

資料3は日課表です。週24時間の授業を受け持っていました。授業と授業の間に休み時間が入っていないので、教具の準備は結構大変でした。子供たちもよく手伝ってくれました。最初、時間節約のためにその日に使う教材を予め出しておきましたが、気がつくとなくなっているのが驚きました。用務員さんから、使うときに出さないと誰かが持っていってしまう、という話を聞きました。日本から持ってきた文房具や縄跳びの縄などがなくなりました。日本製は質もよく人気もありました。すべてに番号をふり、使い終わると数を確認しなければならないのがとてもいやでした。

なくなったことを、校長先生に言うと、用務員さんの子供がとった、と用務員さんに文句を言いに行くので私は困りました。用務員さんから「ものがなくなるとみんな、私の家族が犯人扱いされる」という話を聞いていました。私は、以後、物がなくならないように気をつけました。

ヒデヨ・ノグチ小学校では清掃指導はしません。清掃は用務員さんの仕事、ということになっていました。私の任地は乾燥していて、風が強いところなので、毎日埃との戦いでした。普通教室の窓にはほとんどガラスが入っていませんでした。一度割れてしまうと、新しいガ

ラスを入れる余裕がないからです。ですから、どの教室も埃だらけでした。音楽室は窓ガラスが割れていなかったけれども、それでも、子供が使う椅子や机はいつも埃をかぶっているの、私は始業前にそれらを拭いていました。ある日、校長先生が、私が音楽室を掃除しているのを見て、とんできました。「それは、かおりの仕事ではない、すぐにセニョーラ・ニエベス（用務員）を呼んでくるから」と言って戻って行きました。セニョーラ・ニエベスは、自分の仕事をやめてすぐに雑巾を片手にやってきました。始業前に用務員さんが一人で学校全部の雑巾がけをするのは無理ですし、担任が指導をして子供を使って自分たちの机をふけば用務員さんはもっとほかの仕事ができるのです。私はその話をすると、用務員さんも同感で、「学校も自分のものは自分で掃除をするという教育しなければならない」といっていました。でも、先生方は絶対に掃除をしませんでした。先生自身がこぼした給食のスープさえ、用務員さんと呼んでふかせているのです。この妙な役割分担がエクアドルのやり方なのだという事でした。

私が、校庭に落ちているごみを子供に拾いなさい、と言ったときも、子どもは絶対に拾いませんでした。ごみ拾いは用務員さんの仕事だもの、と言われたときは、驚きました。一度、このことを、校長先生に話しましたが、かおりは余計なことは言うな、と言われました。

私は任地に来てから教育に関する事だけでも、多くの衝撃に遭遇してきました。この衝撃に対する正直な気持ちを何とかしたいと思いました。けれども、この校長先生の考え方と、自分の短い任期を考えて、音楽と体育の授業をしっかりやることに専念したほうが良いと思いました。生徒指導上問題があったり、先生方の用務員さんに対する態度が目にも余るものであったりしても、見ないふりをしました。用務員さんにはこのことを了承してもらいましたし、かおりの考えは賢明だとも言われました。この用務員さんは私のよい相談相手、グチを聞いてくれるたった一人の同僚でした。

私が時間割を作るときに校長先生にアドバイスを受けました。それは、体育は朝早いうちが良いということでした。その理由はまもなくわかりました。私の任地は赤道直下、標高 2200メートルのところがありました。標高のおかげで朝夕は涼しいのですが、日中の太陽は強烈でした。暑さで子供たちはすぐにばててしまいます。

マット運動をしたときでした。ビニールで覆われたマットは、太陽の熱でみるみる熱くなってしまい、肌がマットに直接接触すると火傷をしてしまいます。長袖、長ズボンで運動させたり、マットに水をまいたりしました。

私が初めて音楽室に入ったとき、壁に張り紙がしてありました。前任者の方が書いて張ったものでした。それには、1. ものを食べない 2. ごみをすてない 3. おしゃべりをしないと書かれてありました。それを見たとき、隊員がこれまでに3人も入ってこのレベルなのだろうか、と正直思いました。私は、それを一度ははがしましたが、まもなくまた、掲示しなければなりません。

なぜ、同じことが何度もくりかえされるのだろうか、しかも低レベルなことなのに改善されないのだろうか、としばらく疑問に思っていました。

資料 4. をご覧下さい。私は、子供たちへの教育が定着しないひとつの理由に資料にある

数字に原因があるのではないかと思います。この数字から子供たちの中の多くは、きちんとした家庭教育が行われていない、しかも、虐待を受けていたり、なにか障害を持っていても適切な治療を受けていないことがわかりました。この数字は、臨床心理の先生が行った個別の面接ででてきたものです。学校全体の7割の子供が年齢に合った精神面の正常な成長を遂げていない。これは、本当に、大きな衝撃でした。

資料5にあるように、多くの子供たちは、家庭でいろいろな問題に囲まれて生きています。学校に来るだけでも、音楽室に入ってくるだけでもよしとしなければいけないと、そのとき思いました。音楽の目的も、技術的レベルをあげることよりももっと別のものにしたほうがいいのではないだろうかと思いました。たとえば、音楽療法的な役割を持たせることです。でも、これは私の専門外で困りました。その後の音楽は、音程が多少ずれていても、楽しくたくさんを歌う、簡易楽器を使ってリズムを楽しむ、ことに重点をおきました。

さて、私の活動期間についてお話します。私たち、現職派遣は3ヶ月の国内訓練を含めて2年間の協力隊活動になります。ですから、実際に任国にいるのは1年9ヶ月となります。この期間すべてを活動に充てられるかというところでもないのです。

資料6をご覧ください。いろいろな事情があって、私が要請どおりの仕事が出来たのはわずか1年1ヶ月なのです。

途上国は日本では考えられない事情が多くあります。エクアドルは私が赴任した翌年初めに大統領選挙があり、国内が乱れていました。長期間によるストライキはそのせいです。教員の給料は安い上に遅配されていました。それも2ヶ月3ヶ月は当たり前でした。30歳の教員の給料は220ドル程度、私たちの現地手当での330ドルをはるかに下回っています。私たちでさえ、きりつめて330ドルで生活するのがやっとで手当を上げてもらえるように頼んでいたのに、家族を養いながら働く教員の給料がこの金額で、しかも、遅配ときています。生活がかかっているのですから、新しい政府に交渉するのは当然と思いました。ただ、政府にもお金がないものですから、なかなか解決できず、ストライキが長期にわたってしまいました。

また、エクアドルは火山国なので、火山の噴火がありました。私の任地にも降灰がありました。私も灰の除去作業を手伝いましたが、本当に大変でした。しかも断水、停電で汚れた体を洗うこともできませんでした。断水や停電は3日ほど続きました。ライフラインの普及にはとても時間がかかりました。一度、ダメージを受けるとそれらを回復させるのに非常に時間がかかってしまうのが途上国の現状です。

教育経営も整備されていないので、何か行事を行うのに、無駄な時間がたくさんありました。行事ひとつ行うのに授業が削られました。ここは、私がとてもストレスを感じた部分です。先にお話したように、私は音楽と体育以外のことでは、口を挟まないようにしていたので、ひたすら我慢でした。

私が、子供たちと向き合って仕事が出来ない時間、トータルで8ヶ月もあったわけですが、これをどう過ごすかが私の任地での大きな課題となりました。

任地に向かう前から、空いた時間は、教材研究の他に、体を鍛えることと、スペイン語の

勉強に充てることに決めていました。けれども、それはあくまでも、学校から帰った午後の時間のことでした。長期間のストライキがあるなんて予想もしませんでした。

任地の近くにエクアドルの首都、キトがあります。この旧市街と呼ばれる植民地時代の地域が世界遺産に指定されていたので、まず、私は、この町のガイドブックを作りました。

また、任地に動物園があったので、スペイン語で書かれた動物の紹介文を訳して「動物園ガイド」を作りました。私の活動とはあまり関係がありませんでした。けれども、エクアドルにきた新隊員には役立ちました。

また、この時間で私は千羽鶴を折りました。帰国前に、千羽鶴を使って平和のメッセージを残そうと思ったからです。子どもたちに千羽鶴を見せる前に、全員に鶴の折り方を指導しました。高学年はこれまでの隊員に少し折り紙を教わっていましたが、低学年は経験がなかったのでかなり苦労しました。でも、きれいな紙で何かを作ることは初めてだったので必死に折っていました。少々形が悪い鶴でも、大事に持って帰る姿を見てうれしくなりました。その後、朝会の時間を少しもらって広島、長崎の原爆の話をしました。千羽鶴を見せながら話をしました。子供たちはとても興味深く私の話を聞いていました。授業中おしゃべりしていた子供も真剣に聞いていました。私の話の後、校長先生が補足をしてくださいました。長期のストライキによって得た時間で意外なことができました。

苦労して余った時間を使ってみましたが、できれば、この時間、もっと自分の活動に役立つ使い方をしてみたかったです。ストライキ中は基本的に自宅待機、任地は小さな村で小さな店が数件あるだけで他にはなにもないので、自分の家の中での過ごし方を工夫しなければなりませんでした。

また、安全上の問題から、任地を自由に離れることができない事情がありました。私たちボランティアは国の代表で来ています。無責任な行動で万が一、事故や事件に巻き込まれては、多くの方々に迷惑がかかってしまいます。ですから、特に理由がない場合は、任地にいることになりました。実際、ストライキ中はあちこちで道路が閉鎖されたり、暴動が起きていたりしました。

学習態度は悪かったけれど、子どもたちは、人なつっこくて、私を「かおり、かおり」と呼んで慕ってくれました。また、私が帰国する時にくれた手紙に、「かおりは、私がちゃんと勉強しないから帰ってしまうのね。ごめんなさい。」なんて書いてありました。

ヒデヨ・ノグチ小学校の職員も日本人のものの考え方や習慣に触れて、意識が少しは変わったことと思います。田舎のあまり刺激のない村に日本人ボランティアが入ったことで、異文化に目を向けるきっかけができたのではないのでしょうか。

今、私は、浦安の小学校で自分の任務に励んでいます。でも、多くの厳しい条件から思いのままにならないながらも教育活動を続けている元同僚のことは忘れずにいます。ヒデヨ・ノグチ小学校の校長先生にたまに電話もしています。音楽室を取り上げられてしまうきっかけになった新校舎の建設はいまだに、資金不足から再開されていません。体育は近所の保護者にボランティアで指導してもらっているけれど、音楽は指導者がいないので授業が行われていないそうです。

帰国した現職教員が途上国の教育の実態を報告して、これからどのように援助活動をしていったらよいかを考えていくのはとても大切なことだと思います。それぞれの場所に適した人材の配置、必要な資金や教材などの援助をして、より多くの子どもたちが、よりよい教育を受けることができるようになってほしいと願っています。そして、この報告が少しでもそのお役に立てればと思います。



ヒデヨ・ノグチ女子小学校に関する資料

1. 児童数 約 300 人

学年	人数(人)
1 年	49
2 年	57
3 年	50
4 年	51
5 年	50
6 年	43

※1, 2 年は各学年 2 クラス、 3~6 年は 1 クラス

※1, 2 年は学級担任制、3~6 年は教科担任制。

国語、算数、理科、社会の 4 教科。音楽、体育は協力隊に頼っていた。

2. 時程

1 時間目	7:30~8:15
2 時間目	8:15~9:00
3 時間目	9:00~9:45
朝食・休憩	9:45~10:30
4 時間目	10:30~11:00
5 時間目	11:00~11:45
6 時間目	11:45~12:30

3. 日課表

時間 / 曜 日	月	火	水	木	金
1 時間目	G-6	G-2A		G-5	G-3
2 時間目	M-1A	G-2B	G-1B	G-1A	M-1A
3 時間目	M-1B		G-4	M-2B	M-2A
4 時間目	M-4	M-2B		M-1B	
5 時間目	M-6	M-3	M-5		M-3
6 時間目		M-5	M-6	M-2A	M-4

G-体育 M-音楽

4. 児童の実態

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
感情未発達	5	13	18	9	9	5
精神障害	12	19	15	13	14	8
言語障害	2					
行動障害	3					
鏡文字		5	14	10	2	
運動障害		7	2	8	2	2
心配性			1	7	1	
臆病さ			2	1		
感情形成完成	26	11	17	15	15	26

単位：人

※ 感情形成完成 30%、精神・感情障害 70%

5. 精神障害・感情障害の原因

- ① 家庭内のもめごと
- ② 家庭内暴力
- ③ 身体的、精神的扱いの悪さ
- ④ かわいがりすぎ・過保護
- ⑤ 放任・愛情不足

6. 活動期間(1年9ヶ月)について

※ 実際の活動期間：約1年1ヶ月

現地語学研修	6週間
夏休み	7週間
クリスマス休暇	11日間
学校行事準備のための休校	2週間
その他の祝日	2週間
火山爆発による休校	6日間
大統領選挙による休校	3日間
ストライキによる休校	51日間

7. 45 分の流れ（音楽）

時間（分）	学習内容
2	・ 挨拶の歌
10	・ 出席の確認
1	・ めあての確認
20	・ 歌、リコーダー、鍵盤ハーモニカの練習をする。
10	・ 次時の予告、次時に学習する歌の歌詞やメロディーをノートに写す
2	・ 終わりの挨拶の歌

○45 分の流れ（体育）

時間（分）	学習内容
1	・ 挨拶
10	・ 出席の確認
10	・ 準備体操
1	・ めあての確認
20	・ 主運動
3	・ 整理運動と挨拶

ザンビアでの理数教育

藤 東 喜 史

(理数科・福島県立いわき光洋高等学校教諭)

1. 配属先の概要

- 1) 中高一貫の女子校
- 2) 施設
- 3) 職員

2. 配属先での活動

- 1) 数学の教科指導
- 2) 物理の教科指導
- 3) クラス担任
- 4) Teacher on Duty と呼ばれる週番の仕事
- 5) 課外活動
VTR (学習指導・生徒の様子)

3. 小さなハートプロジェクト

4. 要請外の自主活動

- 1) JOCV主催のワークショップ
- 2) 現地の現職の数学の先生方対象の活動
- 3) 教員養成学校での学生対象の活動
 - ピタゴラスの定理の多様な証明法
 - 母線の長さが一定のときの円錐の体積の最大値(微分の導入)
 - 円周率、円の面積の求め方(数列、極限、積分の導入)
 - Earth Geometry (地球の表面上の任意の二点間の最短距離を求める公式)



5. 最後に

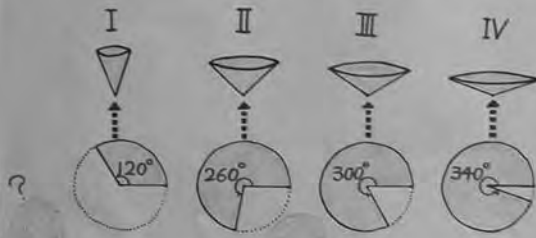
- 1) 青年海外協力隊現職派遣参加で得たもの
- 2) 最後のお別れの歌

The Maximum Volume of Cones

- 1 Question
- 2 Answer
- 3 The Reason
- 4 Evolution

1 Question

There are four different cones whose nets are sectors with the same radius but different angles 120° , 260° , 300° and 340° at those centres as shown below. We are allowed to choose one among the cones and take meal/meat whose amount is equivalent to the volume of the cone we chose. If we want to get as much meal/meat as possible, which cone should we choose?



2 Answer

Turn over here!

Cone III seems to have the largest volume among the four cones. But don't just assume, why?

Answer
We should choose cone III whose net is the sector with angle 300° at its centre.

3 The Reason



Let x represent the size of an angle at a centre of a sector of the circle of radius r and centre C .

The length of the arc of the sector = $\frac{2\pi r x}{360}$

Since this value corresponds with the circumference of the circular base of the cone which the sector would form,

The radius of the circular base = $\frac{rx}{360}$

Thus

The area of the circular base = $\pi r^2 \left(\frac{x}{360}\right)^2$

In right-angled triangle ACO in the diagram OC stands for the height of the cone.

The height of the cone = $r\sqrt{1 - \left(\frac{x}{360}\right)^2}$

The volume of the cone turns out to be the function of the size of the angle at the centre of the sector which is the net of the cone because the volume V can be expressed in terms of x as follows.



$$V(x) = \frac{\pi}{3} r^3 \left(\frac{x}{360}\right)^2 \sqrt{1 - \left(\frac{x}{360}\right)^2}$$

Replacing π by 3.14

$$V(x) = 1.047 r^3 \left(\frac{x}{360}\right)^2 \sqrt{1 - \left(\frac{x}{360}\right)^2}$$

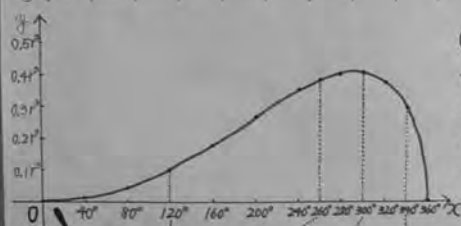
The possible values of x (Domain) are $0^\circ \leq x \leq 360^\circ$

Draw the graph of

$$y = 1.047 r^3 \left(\frac{x}{360}\right)^2 \sqrt{1 - \left(\frac{x}{360}\right)^2} \text{ for } 0^\circ \leq x \leq 360^\circ$$

The table below shows some of the values of x and the corresponding values of y for the equation.

x	0°	40°	80°	120°	160°	200°	240°	260°	280°	300°	320°	340°	360°
y	0	0.0031	0.0507	0.2207	0.4157	0.5291	0.5997	0.5787	0.3981	0.4021	0.3717	0.3077	0



Comparing the four volumes, we can find out that the volume of the cone III whose net is the sector with 300° at its centre is the largest among the volumes of the given four cones.

4 Evolution



Suppose we are given a circular sheet of paper of radius r and making it form a cone by cutting off a sector from it.

What degrees should we leave at the centre of the sector so that the volume of the cone formed could be maximum?



Solution

Since what we have seen from the graph obtained in ③ is just the information that the volume of a cone gets maximum around $x=300^\circ$, we need to introduce

another method in order to find mathematically and exactly the size of the angle at the centre of a sector which gives maximum volume of the cone. The method is to analyze the increase and decrease of the function $V(x)$ derived in ③ using differentiation.

First we transform $V(x)$ into an expression which makes it easier to differentiate.

$$V(x) = \frac{\pi}{3} r^3 \left(\frac{x}{360}\right)^2 \sqrt{1 - \left(\frac{x}{360}\right)^2}$$

$$= \frac{\pi}{3} \left(\frac{r}{360}\right)^3 x^2 \sqrt{360^2 - x^2}$$

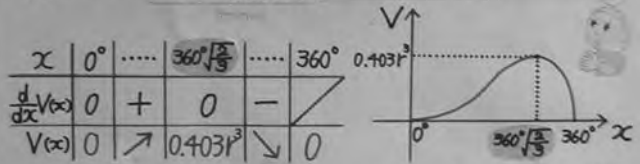


We are trying to differentiate

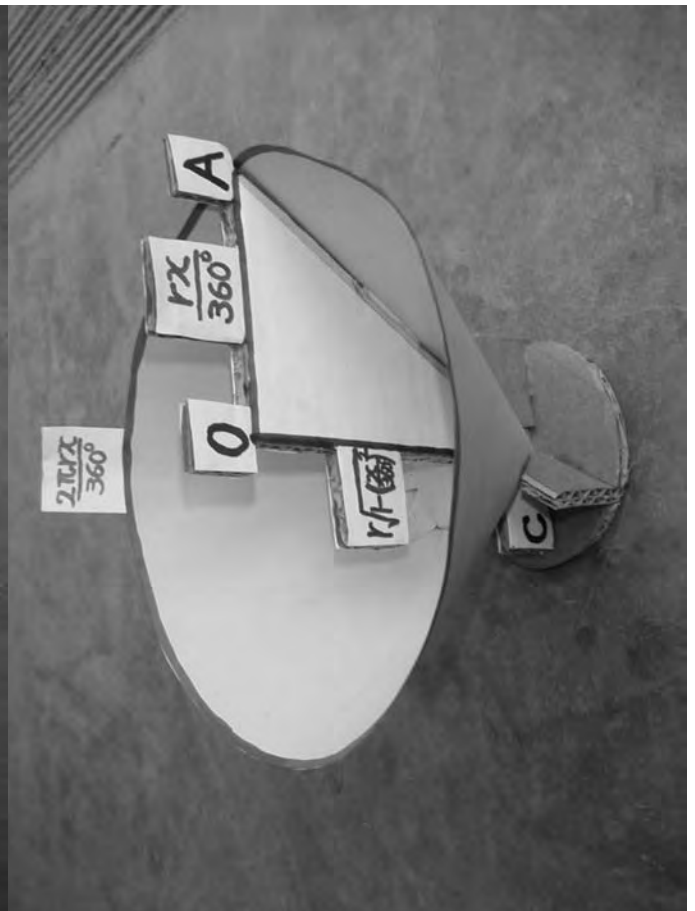
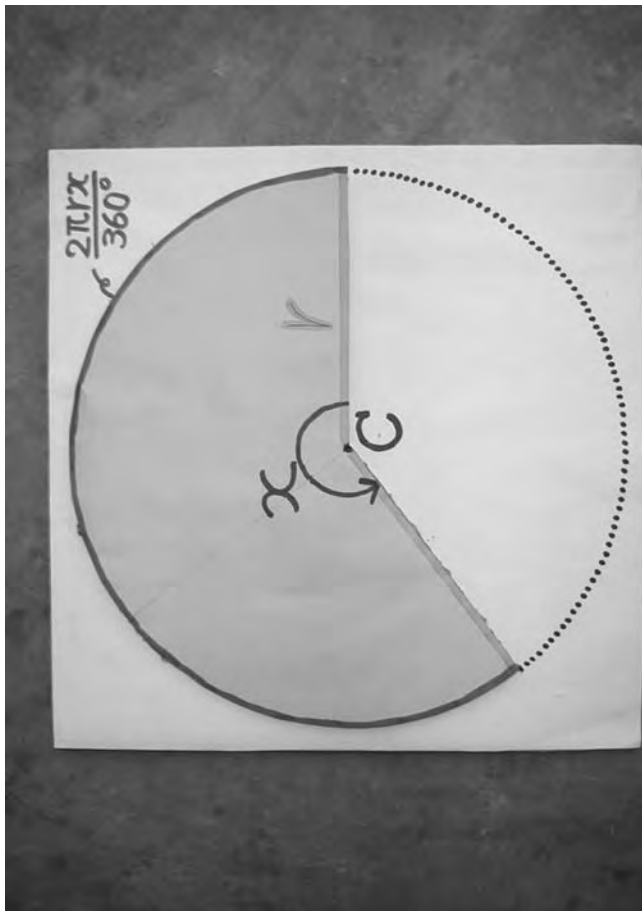
$$V(x) = \frac{\pi}{3} \left(\frac{r}{360}\right)^3 x^2 \sqrt{360^2 - x^2} \text{ in } 0^\circ \leq x < 360^\circ$$

[Faint handwritten notes and diagrams in the background of the page.]

$$\frac{d}{dx} V(x) = \pi \left(\frac{r}{360}\right)^3 \frac{1}{\sqrt{360^2 - x^2}} \left\{ -x \left(x + 360 \frac{\sqrt{2}}{3}\right) \left(x - 360 \frac{\sqrt{2}}{3}\right) \right\}$$



Therefore it has been shown that when $x = 360 \frac{\sqrt{2}}{3}$ the function $V(x)$ becomes maximum. That is to say we have only to leave $360 \frac{\sqrt{2}}{3}$ ($\approx 294^\circ$) at the centre of the sector to make the volume of the cone maximum.



EARTH GEOMETRY

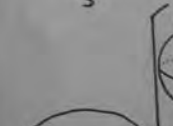
- 1 Definition of latitudes, longitudes and great circles
- 2 Naming latitudes and longitudes
- 3 What is the shortest distance between two points
- 4 Formula for finding the shortest distance between any two points measured on the Earth's surface
- 5 Example

1 Definition of latitudes, longitudes and great circles



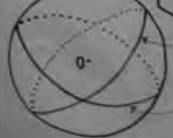
Latitudes: parallel lines which run from west to east forming circles around the Earth's surface

Longitude: lines which run from North to South forming circles around the Earth's surface



Equator: the latitude whose centre is at the centre of the Earth

Greenwich Meridian: the longitude which passes through a town in Britain called Greenwich



Great Circles: circles around the Earth's surface whose centre is at the centre of the Earth

* Equators and longitudes are great circles.

2 Naming latitudes and longitudes



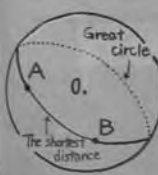
The point A lies on latitude x° North of the equator and longitude y° East of the Greenwich Meridian

$$\Rightarrow A(x^\circ N, y^\circ E)$$

The point B lies on latitude u° South of the equator and longitude v° West of the Greenwich Meridian

$$\Rightarrow B(u^\circ S, v^\circ W)$$

3 What is the shortest distance between two points



Theorem

The shortest distance between two points A and B measured on the Earth's surface is

the length of the arc along the great circle passing through A and B

4 Formula for finding the shortest distance between any two points

Preparation 1

We introduce absolute value using the notation " $| \cdot |$ "

$$\text{i.e. } |x| = \begin{cases} x & \text{if } x \geq 0 \\ -x & \text{if } x < 0 \end{cases}$$

Preparation 2

For the purpose of simplifying the formula, we regard North and East as positive directions, and South and West as negative directions

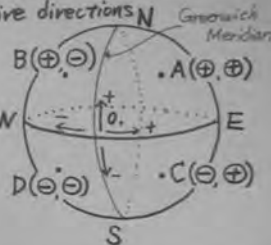
Ex.)

$$A(x^\circ N, y^\circ E) = A(x, y)$$

$$B(x^\circ N, y^\circ W) = B(x, -y)$$

$$C(x^\circ S, y^\circ E) = C(-x, y)$$

$$D(x^\circ S, y^\circ W) = D(-x, -y)$$

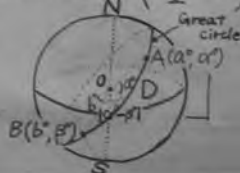


Formula

The shortest distance, D , between any two points $A(\alpha^\circ, \alpha^\circ)$ and $B(\beta^\circ, \beta^\circ)$ where $|\alpha| \geq |\beta|$, measured on the Earth's surface is given by the formula

$$D = \frac{2\pi R}{360^\circ} \cos^{-1} \left[\cos|\alpha - \beta| - \cos\alpha(1 - \cos|\alpha - \beta|) \sqrt{2} \sqrt{\cos|\alpha - \beta|} \sin\left(\frac{|\alpha - \beta|}{2} - |\alpha|\right) \right]$$

where R is the radius of the Earth



5 Example

Calculate the shortest distance between Lusaka and Tokyo, measured on the Earth's surface. Tokyo is on $T(35.7^\circ N, 139.8^\circ E)$ and Lusaka is on $L(15.4^\circ S, 28.3^\circ E)$. Take the radius of the Earth be 6370 km and $\pi = 3.142$



Solution

$T(35.7^\circ, 139.8^\circ), L(-15.4^\circ, 28.3^\circ)$

Since $|35.7| \geq |-15.4|$, we can apply the formula where $\alpha = 35.7^\circ, \alpha = 139.8^\circ, \beta = -15.4^\circ, \beta = 28.3^\circ$

$$\cdot |\alpha - \beta| = |35.7 - (-15.4)| = |35.7 + 15.4| = |51.1| = 51.1^\circ$$

$$\cdot |\alpha^\circ - \beta^\circ| = |139.8^\circ - 28.3^\circ| = |111.5^\circ| = 111.5^\circ$$

$$\cdot \cos|\alpha - \beta| = \cos 51.1^\circ = 0.62796$$

$$\cdot \cos\alpha^\circ = \cos 35.7^\circ = 0.81208$$

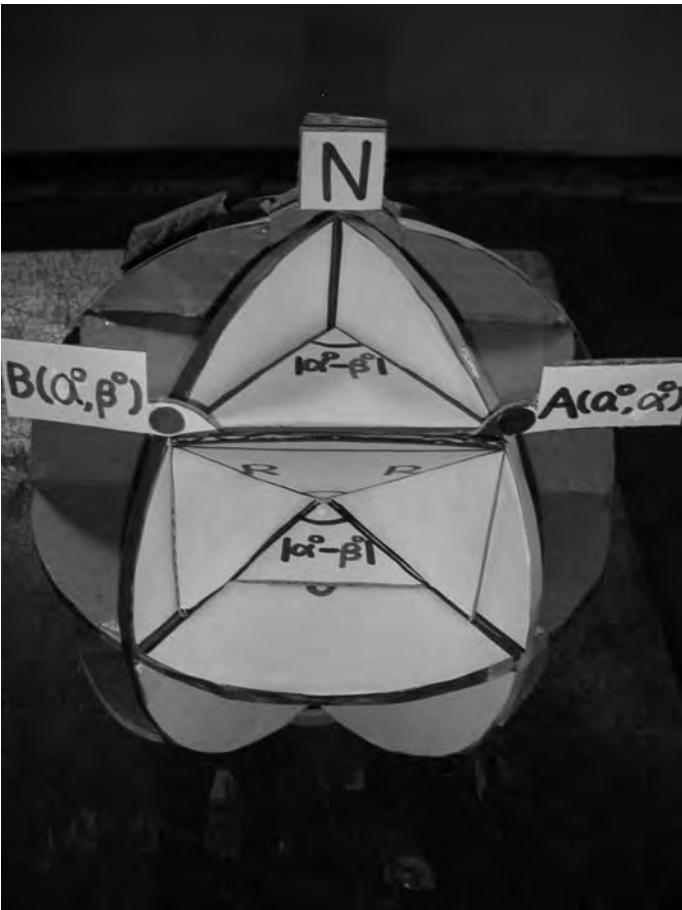
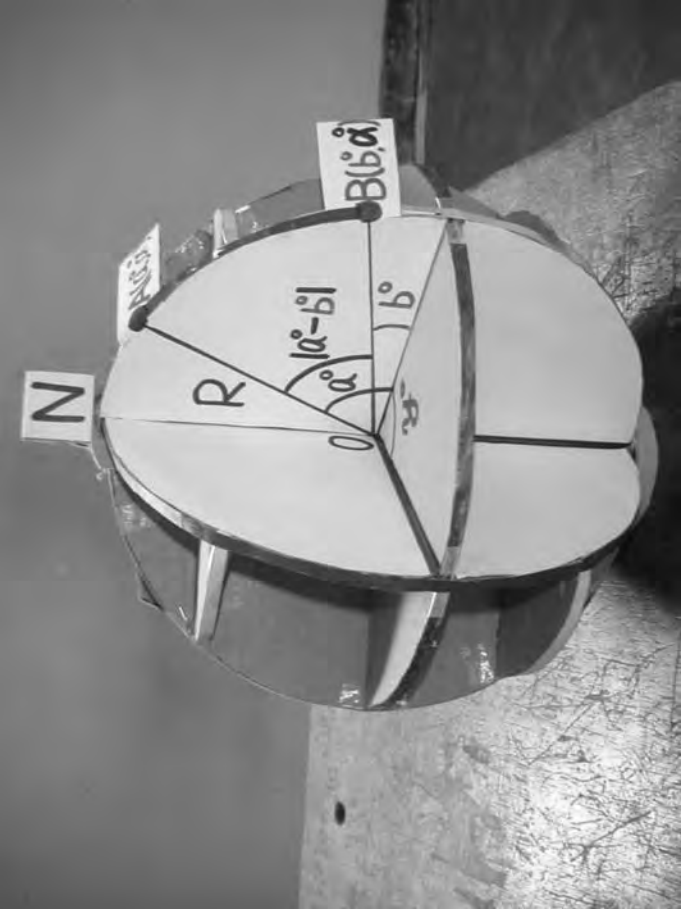
$$\cdot \sin\left(\frac{|\alpha - \beta|}{2} - |\alpha|\right) = \sin(-15.15^\circ) = -0.17623$$

$$\therefore D = \frac{2\pi R}{360^\circ} \cos^{-1} \left[\cos|\alpha - \beta| - \cos\alpha(1 - \cos|\alpha - \beta|) \sqrt{2} \sqrt{\cos|\alpha - \beta|} \sin\left(\frac{|\alpha - \beta|}{2} - |\alpha|\right) \right]$$

$$= \frac{2\pi R}{360^\circ} \cos^{-1} \left[0.62796 - 0.81208 \times (1 - 0.62796) \sqrt{2} \sqrt{0.62796} (-0.17623) \right]$$

$$= \frac{2\pi R}{360^\circ} \cos^{-1} (-0.4119) = 2 \times 3.142 \times \frac{116.225^\circ}{360^\circ} = 129.23 \text{ Correct to the nearest unit.}$$

Therefore the shortest distance between Lusaka and Tokyo, measured on the Earth's surface is about 13,000 km



FINAL REPORT

1. Description of my professional background

I taught maths at public senior high school in Japan for 6 years after graduating a post graduate school.

2. Main objectives of my assignment

I came to ZAMBIA in order to teach maths at Njase Girls' High School in CHOMA as a member of JOCV. Main objectives of my activity were as follows :

- 1) Cultivating pupils' ability in Maths
- 2) Improving surroundings of pupils and teachers
- 3) Offering the opportunities for maths teachers and students to study how to teach maths and advanced maths.

3. Description of the main activities

I will describe the activities I undertook during the period in order of the objectives.

- 1) I was engaged in teaching grade 8 pupils in term 3 in 2002. I made the pupils summarize what they had studied in the year and prepare for learning in grade 9.

I taught grade 10 pupils from term 3 in 2002 up to term 1 in 2004. I tried to make the contents taught in junior level take root in the pupils and establish fundamental skills for the pupils to study maths in senior level.

In teaching grade 11 pupils which had been done from term 1 up to term 3 in 2003, I made much of cultivating total ability of pupils in maths in view of final exam. And also I supplied the pupils with pamphlets which were made by JOCV to help them to prepare for the final exam in maths and science.

I organized, through the whole period as often as possible, extra lessons of my own free will for the purpose of improving pupils' arithmetic and keeping time for pupils to learn maths.

- 2) I was in charge of a class in grade 10 from term 1 up to term 3 in 2003. I drew lists of the class, rolled call pupils every morning, disciplined them, wrote report forms at the end of every term and so on.

I supervised preventive maintenance of a portion assigned in addition to my class room by handling the related girls and instructing them what to do.

Teacher on duty who is supposed to supervise and discipline pupils of whole school wherever and whenever during the period was assigned at the rate of about once in a term.

I took advantage of "Small Heart Project" with the view to buying "Electric pot for cooking

nshima” which was requested for by the school. Fortunately we were able to buy it from Republic Of South Africa through this project supported by Japanese Foundation.

I helped the school to apply for Japan Grass Root Assistance for the purpose of constructing a wall fence surrounding the school. But the Embassy of Japan did not embrace our project so we failed to put it into practice.

3) The workshop organized by JOCV took place in Kalomo Secondary School where I demonstrated my lesson in September 2003. My demonstration seemed to be able to be beneficial to participants.

I held something of a workshop named ‘‘ADVANCED MATHEMATICS ON DISPLAY’’ which consisted of introducing some teaching aids and studying expanded academic contents of maths in syllabus for secondary school as shown in following programme :

Date	Venue	The number of attendants
16 th Feb.04	Choma Secondary School	7 teachers from 2 schools
17 th Feb.04	Namwianga Teachers College	29 students
18 th Feb.04	Njase Secondary School	7teachers from 2 schools
8 th Feb.04	Nkrumah Teachers College	About 50 students
10 th Feb.04	COTSECO	About 100 students

These activities were approved officially by Choma Provincial Resource Centre and Curriculum Development Centre which wrote letters of appreciation to me. I also made and distributed some types of pamphlets concerning this demonstration at a good price so that as many people as possible could buy them.

4. Achievement of my activities

I think the objectives 1), 2) and 3) outlined in the work plan have been almost achieved apart from improving surroundings of teachers and the wall fence project.

5. Major changes seen as a result of my activities

- 1) In the pupils I taught for over 4 terms, I believe they have rather got total mathematical ability including how to study it and gained interest in mathematics in terms of academic way of thinking. In fact they have come to be able to solve difficult problems with their meaning as well as fundamental questions. The extra lessons I planned resulted in increasing time the pupils study in mathematics.
- 2) The school succeeded in realizing more stable ways of providing meals to the pupils than before through ‘‘Small Heart Project’’ I organized.
- 3) The people who attended ‘‘ADVANCED MATHS ON DISPLAY’’ generally implied that my work was beneficial for them and actually in some venues they requested me to leave the

teaching aids I produced and sheets of manila paper on which advanced and academic contents were written after my demonstration. The pamphlets prepared in advance were also well sold. This attempt has encouraged the participants especially those who commit in JETS to study maths again in an academic way of thinking

6. Personal learning experience

These activities were very beneficial for myself as well. I have got a lot of valuable experience by living and working in a different society and culture from what I had been used to. Especially it seemed quite meaningful for me, a teacher in Japan to find out what education, teachers and pupils in Zambia are like. I would like to refer to some aspects I have found in the education system in Zambia after I go back to Japan.

While I was teaching in Japan, it was difficult for me to find time to consider how to improve lessons in maths with teaching aids and expand it to more academic contents because I was in charge of many assignments apart from lessons. I am sure I have grown as a maths teacher through this experience.

7. Major obstacles and how to overcome them

It is true that there were several obstacles such as my ability in language, means of transport, different way of thinking and so on but the head teacher, colleagues in Njase, other school teachers, lecturers, officers above all, pupils I came to know were so kind and cooperative that I was able to manage to achieve my objectives.

Lastly I want to thank you for giving me such a valuable opportunity. I hope teachers in Japan are acceptable in this country and both teachers will continue sharing their knowledge from now on as they have done until now. Thank you very much.

Yours Faithfully

Y. TODO

Japan Overseas Cooperation Volunteers

セネガルでの家政教育

横山真智子

(家政・各務原市立鶴沼第二小学校教諭)

1. 任国の印象

セネガルの首都ダカールは都会。開発途上国と言われる国の多くが首都はかなり発達していると聞いていたが、なるほどその通り、といった感じ。高層ビルもあり、道路は車がいっぱい交通渋滞も深刻。マルシェ（市場）やその付近の路上は売り子やお客さんでにぎわっている。女性たちはきれいな衣装を身にまとっている。男性は洋服を着ている人が多いような気がする。高級車に乗ったり、きれいに着飾っていたりする人々の横で、空き缶を脇に抱え、物乞いをする少年（タリベ）の姿も見かける。イスラム教の修行の一環だそうだが仏教でいう托鉢とはイメージが異なる。裸足で、ボロボロをまとっているといった格好。中には路上で生活している子どももいる。貧富の差が拡大しつつあるようだ。街を歩いている限りでは、物があふれ、豊かであるといった印象を受ける。



【ダカール市内：高層ビルが立ち並ぶ】

人々は、朗らか。話し好き。知り合いに会うと握手をし、近況を尋ねしばらく話をする。これは田舎へ行けば行くほど長く丁寧になる。そして、親切でシャイなところもある。地方へ行き、道を歩いていると、必ず声をかけてきて、道順などを案内してくれる。家族や知り合いの前では、派手に踊る人たちも他のセネガル人の前ではおとなしく、日本人の気質と似ているな、と感じる。もちろん人にもよるのだが、大雑把な印象としてはこんな感じ。時間にルーズだと聞いていたが、今のところ意外ときちんとしているような気がする。ダカールと村とでは違うと思うが。



【独立広場：旧事務所より撮影】

2. 現地語学訓練

赴任後、一ヶ月あまりティエスというダカールから一時間半あまり離れた町で語学訓練を受けた。派遣前に、駒ヶ根の訓練所で3ヶ月間フランス語を学んだが、ここでは語学のみでなく、フランス語を通してセネガル文化についての理解を深めることも目的としている。

私は、配属先が学校であるということでフランス語を2週間半、現地語であるウォロフ語を一週間というプログラムを受けることになった。

担当の先生が非常に熱心で、教材や授業の展開にも工夫を凝らして学習が進められたので、楽しく学ぶことができた。また、セネガル文化などについてインタビューするという「話すこと」が主な宿題として与えられたことも、話す力を身につけるには役立った。また、授業の一環として、近くに住むティエス州のシェフであるモニトリス（生活改良普及員）に直接インタビューできる機会がセッティングされたり、近所に住む小学生に小学校の話を書いたりするなど、アクティビティが多く取り入れられていたことも大変有意義であった。文法の学習は駒ヶ根での復習であったが、用いる単語や文章の内容が、セネガル文化に関わることや実際に学校で使う表現が含まれているものであったため、レベルアップにつながったと思う。

ウォロフ語に関しては、学習期間が短かったこともあり、実際に会話ができるほどの上達は望めなかった。それでも簡単なあいさつができること、基本的な文法がわかったことは、今後自己学習を進める上での基盤となるものであったと思う。

この現地語学訓練期間中は、セネガルの家庭を知るということで、セネガル人宅にホームステイさせていただいた。父・母・娘2人・息子1人・母の弟・父の妹とその子ども。友人などもよく家に泊りに来ていた。



【研修センターにて：担当の Ouly 先生と】

3. 教育事情

セネガルの公立学校（フランス語で教育）のほかに、アラビア学校（アラビア語で教科指導）イスラム教のみを学ぶコーラン学校、カトリック系の私立学校がある。ダカールにはアメリカンスクールもある。

通常は、公立学校か、宗教系の学校のどちらかに入る。小学校入学時に試験はないが、一年ごとに進級試験がある。成績次第で小学校一年生から留年もある。いきなりフランス語での授業となるので、一年生を2回やり直す子も少なくない。ただ、3回目はないので、2回目の試験の成績がよくないときはそこまで、となる。最高でも14歳までしか小学校には入れない。中学校は5年間、高校は4年間、在籍が可能。（一度の留年までは認められる）日本の6・3・3制とは異なり、フランス式に6・4・3制である。それぞれ、卒業資格を取得し、さらに入学のための選抜試験に合格しないと次の学校に進めない。



【村の小学校：休日に井戸水を汲みに来る子ども】

4. 授業

10月から新学期が始まったが、最初の2週間は、会議があるくらいで生徒も先生もまばら。実質的に第3週からのスタートとなった。

要請には「手工芸」分野に対する要望が強かったが、校長と話をしていくとなかで、「さまざまな科目を見た上で、相談して決めましょう。」ということになった。

昨年度の作品を仕上げているクラスもあったが、多くのクラスは、授業計画を生徒と話し

合って決めている。刺繍・クロスステッチ・編物（かぎ針）・織物・ビーズアクセサリー・かばんや帽子などの小物の本や、バカンス中に作ったものを示した。クラスによって反応は異なったが、興味を示したものは、

- ・ ビーズアクセサリー（男子生徒も好む）
- ・ かばんや帽子
- ・ 立体的な刺繍（スタンプワーク）
- ・ かぎ針編みのポーチ（重なりがある）

である。刺繍や、かぎ針編みは、これまで経験したことのある生徒が多いが、ちょっと立体的になっているだけでもセネガルでは見たことがないので興味をひくようだ。布と小枝で作った鍋敷きのような「素朴」なものは、あまり好まれなかった。材料費がかからなくていいとは思っているのだが……。そもそも床（土やコンクリートまたはタイル）に直接鍋を置く家庭が多いので需要もあまりない。

実際に生徒に会う前、実態把握もできてないうちに、自分のイメージのみで試作したものであるため、全部受け入れられるというわけにいかなかったのも当然の結果である。

そこで、生徒の関心が高かったものを改めて作ってみることにした。本に出ている多くの作品例の中から、実際に生徒が興味を示した作品を試作する方が効率的である。

10月は、本格的な授業に入るクラスは少なかった。本格的に始まるのは11月であるようだ。

昨年度の続きで刺繍をしていたクラスで、細かなステッチの方法がよくわからない生徒がいた。言葉の問題もあって、まず教員に実際に見せ、その後、教員から生徒に説明してもらっている。この方が、直接生徒に指導するよりもいいような気がする。とりあえず語学が上達するまでは、この方法を続けると思う。

10月の第2週目に、昨年度のモニター2年生が、集中講義を受けていた。彼らは、バカンス中に2ヶ月ほど村（今年はトゥーバの5ヶ村）に入って、村全体の年齢構成から収入・教育・生産しているものなどの実態調査、及び分析をしてきた（バカンス明けにレポートを提出）。

10月末から、数人のグループに分かれて実際に村で指導をするため、この一週間で、一人ひとりの生徒が、プレゼンテーションを行う。他の生徒は、村人役である。村での指導を前提としているため、ウォロフ語で話す。それでも、ポスターや実物があるので、言葉は理解できなくても、何について説明しているのかは想像がついた。生徒はそれぞれフランス語でレジメを書き、指導を受けている。何人かのレジメを見せてもらった。

一人ずつテーマに沿って、全員の前に立って話を進めていくが、聞いているほうも積極的に意見を出し、質問する。沈黙になることはない。また、プレゼンの途中や発表後に、教員が指導する。この時は、フランス語。ウォロフ語担当教員の他に、毎日交代で、二人の教員がアドバイザーとして加わっていた。

「一度に2つのことを説明するのではなく、1つずつ、きちんと理解できているか確認しながら進めたほうがいい。」「パンフレットを回覧するのもいいが、時間がかかりそうなもの

は、数部用意するか、コピーがあるとよい。」「パンフレットを回覧中に話を始めてしまつては、まだ見ていない人には理解できない。」「質問して、答えを聞いて、という一問一答式でなく、さらに切り返しの質問をして理解を深めるように。」「ポスターを指すとき、体で一部隠れるので、指示棒を使うなど聞いている人が見やすいように。」「きちんと相手のほうを見て手振りをつけるように。」など、具体的な指示やコミュニケーション技術に関わることなどの確かな指導がなされているように感じた。教育実習を思い出す。

セレール出身の生徒はウォロフ語をうまく話せないので苦労していた。途中で何度も中断してしまつたり、やり直しさせられたり、結局フランス語にきなさい、と言われてたり……。ハンディがあるのだなあ、と思った。セレール出身の4人の生徒は、村には行かずに本校での実習となる（農業・飼育・衛生学の授業などで先生として）。

バカンス中に、もしかしたら役に立つかなと思い作成した栄養指導資料も、ほぼ同じような教具（カラーできちんとしたパネルになったもの）が学校にあった。避妊についてのプレゼンにおいては、コンドームの実物や避妊薬のパンフレットなどを生徒が準備してきた。また、鶏の飼育の仕方についても、金網やえさ箱など実物も多くあり、さらにその場で実際に地面に円を描き、飼育小屋をセットしてみせるなど興味深かった。



パラグアイでの音楽教育

谷花邦博

(音楽・広島市立井口中学校教諭)

青年海外協力隊活動報告

14年度一次隊 谷花邦博
派遣国 パラグアイ

パラグアイ


- 正式国名 パラグアイ共和国
- 1811年5月14日独立
- 南米大陸のほぼ中央である南緯19度18分～27度31分、西経54度15分～62度38分に位置し北をボリビア、東をブラジル、南と西をアルゼンチンの3国に囲まれた内陸国
- 国土面積は406,752平方キロメートル(日本の約1.1倍)
- 人口 535万人
- 主要言語 スペイン語、グアラニー語

パラグアイとの日本との関係

- 移民の歴史
- 日本人、日系人 約7,000人
 - 野球・・・岡林(移住地出身者)
 - サッカー留学・・・広山、武田、福田
- ゴマ 多く日本に輸出されていた
- Kahe'e
 - 今はステヴィアの名で知られている甘味料
 - もともとは原住民インディヘナの使っていた植物

活動内容 I

- 国立音楽院
 - 国立オーケストラ設立に向けて団員の育成
 - 未来のパラグアイの音楽界を担う若者の育成




付属音楽院 2年
イントロダクトリオ 2年
プロフェッショナルエレメント 4年
プロフェッショナルディプロマ 4年

1997年の設立 現在7年目

国立音楽院の問題点

生徒の入学人数に対する楽器や設備の不足、そして何よりも重篤なのが教員の不足。
また、現教員に対して、給与の未払いがたびたびある。



国立の機関であるのに水道や電気が止まることもしばしば

国立音楽院での取り組み1



国立音楽院での取り組み2



- オーケストラレパートリーの精選、準備
- カリキュラムの見直し
- 教則本、練習曲作り
- 院長との定例懇談会
- 室内楽指導
- 演奏活動への参加

活動内容 II

- その他の音楽学校
 - ☆アスンシオン市立音楽院でのレッスン
 - ☆エンカルナシオン市文化の家のレッスンとオーケストラ指導
 - ☆イタ市私立E. ヒメネス音楽院でのレッスン
- 教育文化省でのカリキュラムの見直し
- Pascua2003への参加
(教育文化省、アスンシオン市ASAF主催のプロジェクト)



活動内容 III

- プロジェクト
オーケストラプロジェクト2004
国立、市立の両音楽院の共催、日本大使館の後援で、両校の生徒によるオーケストラを編成し、生徒のレベル向上と日本音楽の紹介をさせる。



その他の活動①

- バラグアイ人音楽家とのバラグアイ音楽のCDづくり
現地音楽家Papi Galan (アルピスト、ギタリスト)氏と日本人留学生藤枝貴子さん(アルピスト)と音楽隊員3人の共同制作。国内演奏旅行、ラジオ出演。



その他の活動②

バラグアイ人音楽家との
「国際交流コンサート」
2003年3月 第一回



その他の活動③



その他の活動④

- ・ 現地日系人日本人の学校における演奏会と現地日系人のための教育研修講座
- ・ 日系青年ボランティアの企画による移住地訪問演奏



協力隊活動を通して感じたこと

- ・ 日本の良さ
人を敬う心・約束を守ろうとする心
- ・ 教育の大切さ
例) 政治に関して マナー・・・ゴミ、迷惑
- ・ 人間の暖かさ
人類共通の感覚・思いやり

生徒へ伝えたいこと

- ・ がんばれ
みんなに与えられているものへの感謝
- ・ 日本の国のよさ
これを経いでいくか、だめにしてしまうか、よりいいものにするかは、みんなにかかっている
- ・ みんなにもできる国際協力
いろいろなスタイルの国際協力があります。小さなことでも、取り組んでみよう！

教育関係者に伝えたいこと

- ・ 教育の持つ意味
社会を作る基盤は教育
- ・ 基礎基本の大切さ
基礎基本を徹底する日本の教育の素晴らしさ
- ・ 日本人としてのよさ
人に迷惑をかけないなど、小さなマナーの大切さ

明日へ向けて

- ・ 現代社会の問題
地球規模で解決しなければならない問題が増えてきている。
- ・ 日本の世界の中での存在
援助をただ単なる国際的地位の確立のために行う時代ではなくなってきている。
- ・ 日本のよさをもう一度考える
日本の歩んできた努力の道を思い出す。日本には欧米化より大切なものもある。



ブルガリアの美術教育

佐藤雪絵

(美術・茂原市立南中学校教諭)

H14年7月～H16年3月 ブルガリア・スタラザゴラ市ロディーナ芸術学校に赴任
5歳～20歳くらいの生徒約100人の学校で10歳～15歳のクラスを受け持つ
日本文化を取り入れた工芸（工作）を担当した。

*以下 現地に赴き、約半年後の隊員報告書の内容。

1. 受入国での生活

<生活上の創意工夫>

日常生活の上で、特に日本と異なる部分は、ほとんどなく取り立てて不便さを感じていないのが実状だが、(というよりも、いろいろなことに、もう慣れてしまったのかもしれない)強いていえば買い物と洗濯、そして物の破損だろうか。

買い物については、大きなスーパーマーケットに行けば、日本のように好きなものをゆっくりと好きなだけ吟味しながら選び、買うことが出来るが、近所の小さな店ではまだ共産時代の名残なのか、カウンターの後ろのものをいちいち指示して取ってもらわなければならない、かなり面倒である。混んでいる時間などは行列になっていたりしてかなり疲労してしまう。土日を利用してなるべく大きなマーケットでまとめて買うようにしている。特に肉類などは、小売店ではまず肉の部位を説明して、グラム単位で切ってもらおうという具合なので、これもかなり面倒な作業であり、パックで売られているマーケットで買うのが一番である。またマーケットは荷物を入れる袋を買うというシステムなので、常に折りたためる袋をかばんに入れて出かけている。

次に洗濯であるが、もちろん我が家には洗濯機はなく（ブルガリア全体では大分普及してはいるようだが）、すべて手洗いである。日本にいた時は全自動洗濯機で行っていた作業を、自分でやるということで、改めていろいろなことを発見してその部分では楽しい作業である。着るものへの愛着が増すことも確かである。しかしものすごく時間がかかる。また洗剤によってはかなり強いものもあるようなのですぎをしっかりとやらないと、かぶれたりしてしまうらしい。皮膚の弱い人用の（子供用の）洗剤も売ってはいるが良いかどうかはわからない。下着類は毎日洗って部屋に干しておくが、あとは週に1,2回の洗濯で済むように着まわしをしている。それから布団干しは、今のアパートは幸いテラス部分が通常よりもかなり広いのでそこにヒモをつけて、天気の良い日は全部干すことができるが、近所はあまり干しているのを見たことがなく、その辺はどうなのだろうか？といつも思っている。実際はアパートの立地条件が悪いと、1日のほんのわずかな時間しか日が当たらないという問題もある。健康面と衛生面を考えると、アパートの部屋の向きはとても大事なことである。

最後に、物の破損と修理であるが、こちらにきて感じたことは基本的には自分で直すことが大前提である。こちらのアパートの外観はとても古くかなり傷みも激しいところがほとんどであるが、それとは対照的にアパートの家の中はとてもきれいで驚くことが多い。というのも皆、壁から床からすべて改装しているらしい。こちらのアパートはみな買い取りの家が多いので、その辺は自由らしい。内装は確かに自分でなんとかなるが、技術的な要素が必要とされる場合は自力では無理であり、プロの力を頼るしかない。

さて、こちらのものとはとにかく壊れやすい。冷蔵庫、ボイラー、ペチカ(電熱調理機)、水道関係。電気や、水道や、をこちらで何回呼んだか、もう忘れてしまった。(位呼んでいる)でもすぐにはこない。しばしの辛抱。しかし、みな親切、丁寧で、非常に有り難い。多分、そもそもの品質もさることながら、老朽化が進行していてすべてが、一昔前のものである。なんとかかごまかしながら使っているような感じなので、しかたがない。冷蔵庫などは、本当にビックリするくらいうるさい音がするのだが、ロシア製だとこのくらい当たり前と言われてしまった。こちらでは、すべてが電気で動いていて、いったん停電になると何も出来なくなるが、その時は何もしなくて良い日となるべくあっさり決めて、ゆっくり回復を待つこと(しかない)。あとは、「ここは日本ではないんだ」と改めて感じながら、ブルガリアのシステムの向上について何をどうしたらよいかを少し考えるのも良いと思う。あとは日頃から、常にフレキシブルな対策を講じていけば、その場であせることはないと思う。

<受入国の人との交際>

ブルガリア人は、日常生活の中で誕生日やプラズニックを非常に大切にしている仕事や学校よりも、優先順位は上である。特に学校などは、誕生日なので早退する、欠席するというのはあたりまえのようである。

したがって、おのずとこちらもそれにあわせた付き合いを要求されることもしばしばである。赴任当初は、向こうも気を使ってくれたのか、本当にいろいろなところへ呼んでもらい、多くの人と知り合い、街中で逢うと挨拶を交わす人々もかなり出来た。しかし、すべてに行かなくても良い、ということを見つけてからは多少楽になり、適度にこなしている。基本的には職場での、人間関係を軸にしての広がりなので、まずは仕事をしっかりとやりたいという自分自身の考えを理解してもらえていけば、それによつての障害はないと思う。あとは日常的な会話を適度に楽しめるようにして、そして何よりも自分が、前向きに明るく過ごせるように工夫すること。あと、ブル語の壁は高くても、心の壁を厚くしないようにというのは大切だと思う。

<語学の習熟度>

日常の会話を聴くという部分では大分慣れてきているが、いざ自分がしゃべる場面になると、やはり単語力が乏しい。授業でよく使う単語や言い回しなどはわかっても、子ども達から早口ブル語でまくし立てられて、常にオシテベドヌシュ、モーリャ。ポ、バーブノ(もう一回言ってゆっくりと)であり、そのたびにいろいろなことを教えてもらっているが、その

理解も？難しい。週に1回、先生の下で習っているが、やはり使わないと忘れてしまう。職場でも、仕事上の単語は大体わかって、いざ世間話になると、ほとんどわからないが、なんとなく勘で参加している。でもなんとかかなるところは、周りの協力のおかげであろう。

すべてを理解するのは、ムリとしても半分くらいはなんとかできるように、日々の生活の中で工夫し向上できるようにしたい。

<余暇の過ごし方>

基本的には赴任先であるシコラはフル営業(月～日)であり、常に誰かが勤務している状態であるので、結構忙しい職場である。(場合によっては土日に行く。)

仕事がないというブルガリアではめずらしい位、仕事はある？。従ってあまり余暇をもてあますことはなく、土日は買い物や、身の回りの事や何かで過ぎてしまっている。あとは、授業の準備や教材の研究や教材探し(マテリアルの研究)が割と大変である(ブルガリアはやはり良い材料はあまりないので)。

余暇といっても、私の場合、趣味と実益が一緒の仕事なので教材研究、そのものが、自分の好きなやりたいことなので、常に何かを制作している状態である。授業サンプルを作っておくことも、実はとても重要なことである(授業での説明が半分で済むので)。あとは、長い休暇の時は少し足をのばして、写真をとりに出かけたり、または絵を描いたりしている。あとは、近場の友人達と連絡しあって、たまに会って情報交換している。

2. 受入国での業務水準

<担当業務の受入国での状況>

そもそも、「チタリシテ」の位置付けが日本のシステムの中ではっきりと、あてはまるものがないので、良く理解できずに不安だったが、実際にこちらにきてみて思ったよりもきちんとされていたのに驚いた。日本の芸術学校という枠の中に入れるくらいのレベルで、しっかりやっている。実際通ってきている生徒の質もかなり高く、4歳から18歳までいるが、やる気のない生徒はほとんどいなく、みな一所懸命に課題に取り組む。教師サイドもみな自分の担当業務をきちんとなしており、また協力体制もあり、仕事を行う上では、やりやすく、とても良い状況である。

現在のところ絵画、陶芸、グラフィックデザイン、工芸、芸大受験用コースに分かれて活動している。私の担当しているのは、工芸コースである。主に、日本文化を織り交ぜながらの工作を行っている。小学生が中心なので教材も、扱いやすい安全なものを工夫している。



ただし、教室環境や設備面で多少の不自由さがあり、対策を思案中ではある。また良い教

材を用意するためには、日頃からインターネットなどでいろいろな情報を集めておくことも必要だと感じている。こちらではそういった種類の本は一般書店にはまず売っていないので。現在までのところ、折り紙、書道、凧、モビール制作を行っている。



第2部

国内と途上国をつなぐ帰国隊員の活躍 —現職教員派遣は我が国の教育の改善に どのように貢献するのか—

ここでは、カンボジアバットアンバン州ワットカンペイン小学校阿部康裕と長野県小諸市立美南ガ丘小学校を結んだインターネットライブ授業の実践報告がありました。その報告は、1月21日(金)付けの日本教育新聞でも報道されました(巻末資料参照)。

インターネットライブ授業を通しての国際理解教育の推進

小諸市立美南ガ丘小学校教諭 中山晴美

総評 国内と途上国をつなぐ帰国隊員の活躍

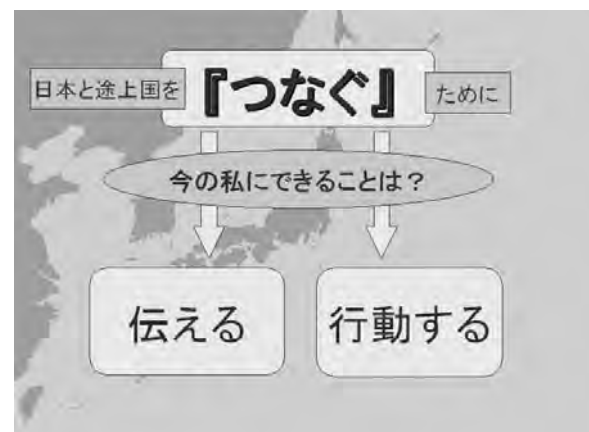
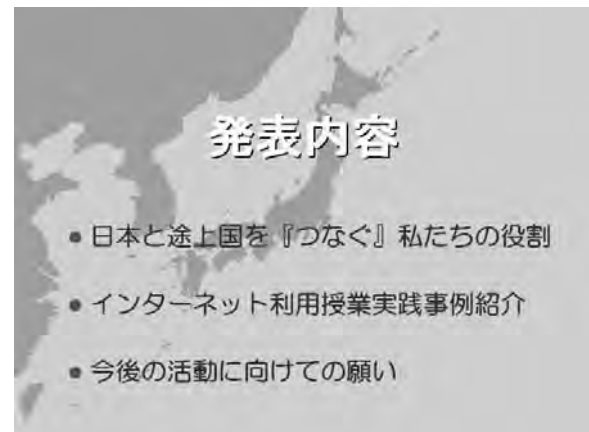
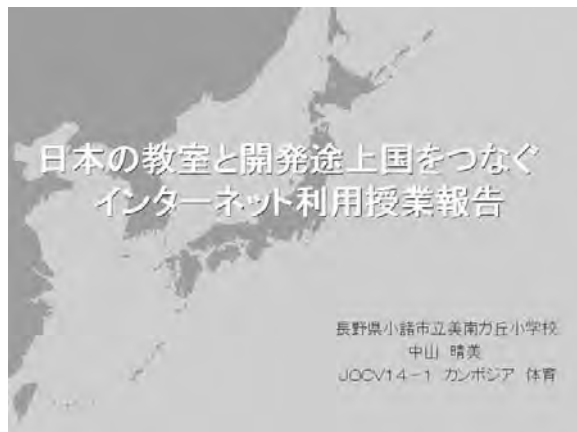
小諸市立美南ガ丘小学校長 上原吉雄

インターネットライブ授業は、リアルタイムで途上国とわが国の教室の子どもたちの対話の実現を通して地球規模でものごとを考えるきっかけを与え、鮮明な異文化体験の機会をつくり出します。これは異言語・異文化間での対話です。派遣現職教員の蓄えた経験、培った語学力、得た教訓をもってはじめて実現できます。派遣現職教員支援課題では、技術面でのサポート、交流内容に関する助言、現地と実施校の間の調整などを行っています。

カンボジア—長野県小諸市立美南ガ丘小学校における ライブ授業

中山 晴美

(体育・小諸市立美南ガ丘小学校教諭)



第一回 インターネットライブ交流会に向けて


カンボジアのことで知りたいこと
カンボジアの子どもたちに聞きたいことを
質問しよう

いつも
どんな遊びをしているの
かな
僕たちとは違うのか
知りたい

カンボジアの歴史について調べ
ているけど、戦争前はどんな国
だったかわからない
親や家族に聞いたことがあつた
ら教えてほしい

メール語を知りたい
あいさつ等は調べれば
分かるけど、みんなが
言われて嬉しいのはど
んな言葉だろう

インターネット利用授業 実践事例紹介






カンボジア
バタンバン州
ワットカンベイン小学校
5・6年生

日本
長野県小諸市立
美南ガ丘小学校
5年1組

第一回 インターネットライブ交流会の流れ

めあて 相手に聞きたいこと、教えてほしいことを話し方につけて伝えよう
相手からの質問を内容の意味を考えながら聞き聞き取ろう

展開		
めあての確認		5分
交流会	あいさつ 自己紹介 カンボジア 日本交互に2つずつ計8つずつの質問を交換する カンボジアの子ども(メール語) 現地隊員翻訳(メール語→日本語) ↓ 日本の子ども(日本語) 担任翻訳(日本語→メール語) あいさつ	40分
感想記入・発表		15分
次回の交流までの活動及び課題の確認	次回はお互いに出された質問について答えを用意しておき、 その内容について交流する	

インターネットライブ交流会

2004.12.22(WED)



第一回 インターネットライブ交流会を終えて


子どもたちの言葉から

- 言葉が違っても、心の交流で伝えたいことが通じることが、心配だったけど、カンボジアから「よくわかりました」と言われたときは嬉しかった。
- 交流するまで、カンボジアの人は「かわいそう」と勝手に思っていたけど、交流してみたら印象が全然違った。仲間だと思った。
- 「カンボジアに遊びに来たいですか」と質問された瞬間、私は心の中で「行きたい!」と叫びました。すぐ離れていて会うことができないけど、本当はもっと話したいと思ったからです。

- 「日本の経済が繁栄しているのはなぜですか」と質問され、はじめは意味さえ分からなかった。そんなことを知っていることに驚いた。日本に興味があるのかな? もっともって日本のことを伝えたい。そのために自分たちが知らなければならぬことがたくさんあるような気がした。
- 「私たち日本人が、カンボジアの国のためにできることはありますか」と質問した。どんな答えが返ってくるか楽しみだけど、ただ答えを待っているだけでなく、また、カンボジアについていろいろ調べて、次の交流、までも自分で答えを探しておきたいと思った。

示唆されたこと

子どもたちは、これまでの学習を振り返り、今の自分の在り方を問い直す中で、自分の本当の思いや願いに気づいたり、自分自身の成長を実感したりしながら、より深く広く人や物事に関わっていきこうとするのではないかと...



今後の活動に向けての願い

- **学級として**
今回の活動をのちのきっかけとして、世界へと視野を広げると共に、今生浪している日本という国に対する理解を深め、より深く人や物事と関わっていきける子どもたちを育てたい。
- **学校として**
総合的な学習としての位置づけを明確にし、継続的な活動をしていく。同僚の理解を得ることを目標とし、経験を共有できる機会をつくらせていきたい。
- **地域に目を向けて**
海外出身の保護者との交流や、地域で行われる活動への参加を通して自分自身の経験として積み上げていくことも含め、自らの視野や行動範囲を広げていきたい。
- **自覚をもって**
私自身が自らの役割を自覚して「伝える」「行動する」ことを繰り返していきたい。



第二回 インターネットライブ交流会に向けて

8班 メンバー 翔 涼平 彩生

千尋 瑠美

カンボジアの子どもたちからの質問

日本には、どんなめずらしいものがありますか。

班で考えた答え

話す内容	話す人・資料
① 私たちが選んだ日本のめずらしいもの4つを紹介します。	瑠美
② 最初は『東京タワー』です。 日本の首都東京にあります。 高さが333メートルあります。 放送用のアンテナとして使われています。 観光客もたくさん来ています。	千尋 写真
③ 次に、『着物』という服を紹介します。 日本に古くからある服です。 今は七五三・成人式・結婚式など特別なときに着ます。 この写真は私が着たときのものです。	彩生 写真
④ 次に、『富士山』を紹介します。 富士山は日本で一番高い山です。3776メートルあります。 登山客がよくこの山を登ります。 冬になると雪がきれいです。	翔 写真
⑤ 最後に『奈良の大仏』を紹介します。 身長は14.5メートルです。奈良県の東大寺にあります。 世界三大仏のひとつです。	涼平 写真
⑥ 終わります。	

<p>すもうは日本の国技です。</p> <p>円い場所から相手を押し出したり、転ばせたりすると勝ちです。</p> <p>すもうをする人たちは、みんな太っていて力があります。</p> <p>③ 二つ目は『スキー』です。</p> <p>冬にやるスポーツです。</p> <p>板とストックを使って、雪の上をすべるものです。</p> <p>私たちも、冬になるとスキーを楽しみます。</p> <p>④終わります。</p>	香	絵 写真
---	---	---------

1班 メンバー 茜 駿大 みさき
拓馬 勇也

カンボジアの子どもたちからの質問

日本の生とは、何色の制服を着ていますか。

班で考えた答え

話す内容	話す人・資料
<p>① 私たちの学校は制服というものがありません。</p> <p>だから、どんな色の服を着てきてもいいのです。</p> <p>でも、運動をするときは、運動着といってみんな同じ服を着ます。</p> <p>季節によって青や白の服があります。</p>	<p>勇也</p> <p>実物</p>
<p>② でも、中学校からはちゃんとその学校の制服があります。私たちの行く中学校は黒色の制服です。</p>	みさき
<p>③ 中学校にも運動着があり、学年ごとに紫・青・黄緑と色が分かれています。</p> <p>④ 終わります。</p>	実物

3班 メンバー 工喜 恵濤理 亮太
悠貴子 将人

カンボジアの子どもたちからの質問

カンボジアに遊びに来たいですか。

班で考えた答え

話す内容	話す人・資料
① クラスの人全員に聞いてみると、39人中36人がカンボジアに行きたいといました。	悠貴子 グラフ
② 理由は『行ったことがないから』『おいしい食べ物がありそう』『いろんな遊びがありそう』『行ってどんな国か知りたい』などがありました。	亮太
③ 逆に、行きたくないという人が3人いて『行ったことがないから少し不安』という理由でした。	工喜
④ 終わります。	

6班 メンバー 彩美 厚樹 美緒
敬輔 凌

カンボジアの子どもたちからの質問

皆さんの学校は一日に何時間勉強しますか。

班で考えた答え

話す内容	話す人・資料
① 私たちは、8時15分に学校に来て、午後の4時に帰ります。学校は月曜日から金曜日で、曜日ごとに勉強する時間は違います。	
② この表を見てください。 5年生の場合、月曜日と水曜日は5時間、火曜日、木曜日、金	時間割表

<p>曜日は6時間勉強します。</p> <p>③ 給食が一時間、そうじは20分です。</p> <p>④ 終わります。</p>	
--	--

4班 メンバー 誠光 真琴 京 祐太

カンボジアの子どもたちからの質問

みなさんは、休み時間にどんな遊びをしていますか。

班で考えた答え

話す内容	話す人・資料
<p>① 僕たちは、休み時間にドッジボールをやっています。</p> <p>これは、ボールを使った遊びです。これが、ボールです。</p> <p>年に2・3回の大会があります。</p> <p>これは、僕たちが実際にドッジボールの大会に出たときの写真です。</p>	<p>祐太</p> <p>実物</p> <p>写真</p>
<p>② 冬は雪が降るので雪合戦という遊びもします。</p> <p>雪の玉を作って投げる遊びです。</p> <p>寒いけど、からだがあたたまる遊びです。</p> <p>雪合戦をやったときの写真です。</p>	<p>誠光</p> <p>写真</p>
<p>③ 終わります。</p>	

7班 メンバー 広大 綾 直暉

彩香 一貴

カンボジアの子どもたちからの質問

学校が休みの日、みなさんはどこに遊びに行きますか。

班で考えた答え

話す内容	話す人・資料

① クラスでアンケートをとり答えをまとめました。	広大
② 『友達の家』『公園』『ゲームセンター』などが多い答えでした。	一貴 絵
③ ゲームセンターというのは、ひとつの場所にたくさんのゲーム がおいてあるところのことです。	彩 写真
④ 終わります。	彩香

美南が丘小ーワットカンペイン小、ネットミーティング 技術スタッフ反省

<準備面>

- ・設備上、ライブ授業の会場を通常の使用教室にできなかったことは遺憾。

<機材・施設面>

- ・ファイヤーウォールを外してポートを開ける作業が必要である。
(→ 学校のPCのセキュリティについて、管理者との事前の相談が不可欠)
- ・向こうの細かな表情が見えにくかった(画質の問題)
(→ Webカメラではなく、ビデオカメラを使用できればより柔軟に映像を送れる)
- ・Webカメラとスクリーンの位置を近づけないと、視線がカメラに向かないことに注意。
(→ 児童はスクリーンに釘付けになってしまう)
- ・音声どうしても途切れ途切れになってしまう。
(→ 指向性マイクへの理解が必要である。今度、高感度専用マイク購入が必要)
(→ 内容面にも関わること。2回目以降、音声だけ別ソフトを使えないか?)
(→ スピーカーは大出力で外付け物を使うべきである)
- ・PC教室の使用では、どうしても38人の顔が見られる座席位置が難しい。
(→ 視聴覚室など他の教室にPC設備を移動することが大切)
- ・授業を記録するVTRカメラは最低でも2台は必要である。
(→ USBケーブルの延長コードなどの用意が必要になる)
- ・より双方向的にやりとり(クロストーク)するにはどうするか?
(← 翻訳者が仲介する場合にもクロストークがありえることに注意する)
- ・ライブ映像それ自体を保存できるメッセージャーを準備する必要がある。
- ・今後、3カ所以上の同時ライブ展開なども技術的には視野に入れられる。

<技術・内容面>

- ・交流の導入は概ね成功であった。子ども達の反応も大変よかった。
- ・両小学校の質問内容の程度にズレはあったが、それ自体も考察の対象になる。
(→ 双方8つの質問は教師間で予め共有され、翻訳されていた)
- ・第1回目という性格上、即興での質問→翻訳→回答はなかった。
- ・質問の回答については、インターネットライブに限らず、VTRにとってMPEGで送り、紙や写真も(ものによっては予め国際宅急便で)送る等、他のメディアも併用すべき。

<その他・所感>

ネットミーティング前後に他の学年・学級の先生方から「うちのクラスでも交流できないか?」という相談などを受けた。このような交流の広がりこそが、派遣現職教員の活躍の場の具体的な広がり1つであると考えられるだろう。日本・カンボジア双方の授業者が事前に十分な情報交換を行っていたことが授業の成功を支えたが、同時に、ライブであるという性格を前面に出し、即興性(その場で出て来た質問を翻訳etc)を取り入れることで、VTR交換等との差別化を図ることが可能となるだろう。

文責 小原 豊(筑波大学 CRICED)

総評 国内と途上国をつなぐ帰国隊員の活躍

上原吉雄
(小諸市立美南ガ丘小学校長)

中山晴美教諭には昨年4月、本校に赴任していただきました。学校では3月中旬に新年度の校務分掌や担任を決めるため、校長は3月中旬ころまでには本人に会っておかなければなりません。中山教諭は3月19日に帰国予定でしたので、住宅の件でカンボジアへ電話を入れたり、帰省した翌日に学校へ来てもらったりしました。新年度がスタートしてからも、帰国直後の転任で大丈夫だろうかと心配しましたが、5年生の担任としてよくがんばってくれました。こうした問題を解消するだけでなく派遣先と日本の学校との交流をスムーズに進めるためにも派遣終了後は元の学校へ戻るほうがよいのではないかと、私個人としては考えます。

午前中の帰国隊員の皆さんのお話をお聞きしながら、中山教諭の経験を地域へ還元するという点で、校長としてもっと配慮すべきだったと反省しております。

昨年5月に小諸とその周辺の小中学校16校の職員350名ほどが集まる会で、中山教諭に『カンボジアの子どもたち』というテーマで発表をしてもらいました。海外協力隊の存在や活動が、特に若い教職員には参考になったのではなかったかと思います。また12月の市内の校長会の折、本校で実施されたライブ授業の話をしたところ、高校の校長先生から、「今高校生の中には海外協力隊への関心が高いので、中山先生にぜひ話をしてほしい」という依頼がありました。貴重な体験が高校生の進路指導に役立ち、ひいては地域に還元できる大変よい機会と快諾いたしました。



数年前から小諸市では市内在住の外国人との交流に取り組んでいる団体があり、市教育委員会も後援し、年1回『こもろ地球人祭』という催しを、小中学校の体育館などを会場にしておこなっています。地域在住の外国人の皆さんのコミュニケーションを図ったり、諸外国の生活や文化に触れたり日本の文化を知ってもらおうというものです。また市立図書館では『おはなし世界めぐり』という企画で、毎月1つの国を取り上げ、読み聞かせを中心に世界のいろいろな国を知る活動をしています。今後こうしたところへ積極的に関わっていくこともできるかと思います。

授業への還元ということから申しますと、やはり総合的な学習を中心に取り組むことがよいかと思います。本校の総合的な学習は、3年生から地域をベースに置き人権・環境・福祉・国際理解などを学年テーマとして設定しています。国際理解教育は6年生でやることになっていますので、中山教諭の取り組みも、これから学年に広げていくこととなります。今回のライブ授業のような形での交流も、継続して進められるよう支援していきたいと思っております。

第3部

現職派遣の意義と課題：パネル・ディスカッション

—やりがいのある現職派遣制度を作るために—

第1部では派遣現職教員のすばらしい活躍を確認し、第2部ではその経験が帰国後に生きる事例を確認しました。第3部では、このような価値ある現職教員特別参加制度を一層発展させることを求めて、現在、どのように現職教員が派遣され活躍できる体制が整えられてきたか、現職教員の派遣をさらに広げていくには何が必要か、派遣現職教員が帰国後に活躍する場をいかに広げていくかを検討しました。その概要は、1月13日(木)付け教育新聞でも報道されました(巻末資料参照)。

モデレーター

筑波大学教育開発国際協力研究センター 磯田正美

パネリスト

文部科学省の取り組み

文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室長補佐 野田潔

青年海外協力隊事務局による推進体制

国際協力機構青年海外協力隊事務局長 大塚正明

横浜市における青年海外協力隊派遣の取り組み

横浜市教育委員会教職員人事課長 大野敏美

派遣現職教員として参加して

石川県かほく市立宇ノ気小学校教諭 浅香信之

現職教員の専門家としての可能性

都立白鷗高等学校教諭 高橋進

文部科学省拠点システム構築事業派遣現職教員支援課題では、派遣前・派遣中・帰国後という流れの中で、派遣現職教員が活躍をすることを支援しています。派遣現職教員支援課題の平成16年度の事業内容は、巻末資料をご覧ください。

モデレータからの問題提起

礒 田 正 美

(筑波大学教育開発国際協力研究センター)

本日のシンポジウムの主題は、派遣現職教員がいかに活躍しているかを日本全国の皆様に知っていただくこと、そして、それが日本の国際貢献、途上国の教育に限らず、我が国の教育界にもいかに有意義であるかを確認することです。

一部の教育関係者の間に、私ども関係者の想像を超えた誤解があります。例えば、帰国したら、外遊してきたのだから精進しなさいというような言葉がけがなされることが時にあります。本日のこれまでの帰国隊員の経験披露から、このような考え方が全くの誤解であることは明らかなのですが、逆に、派遣現職教員の皆様が国内同様に国外でも活躍していることが理解されていない状況をそこから知ることができます。そしてこのような誤解を知るにつけ、これほどまでに活躍している現職教員の皆さんが、一層、任地で、そして帰国後に活躍するにはどうすればよいか、そしてこのような意義ある制度に一層多くの方が派遣されるようにするにはどうすればよいかということを、ここで問題提起したいと思います。

この主題のために今日は、5名のパネリストをお招きしました。はじめに本会の主催者であります文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室から野田潔室長補佐が、現職教員特別参加制度と文部科学省側からの期待をお話下さいます。続いて、国際協力機構青年海外協力隊から大塚正明事務局長が JOCV としての推進体制と JOCV 側から現職教員に対する期待をお話下さいます。そして、派遣する教育委員会側を代表して、横浜市教育委員会より、大野敏美教職員人事課長に派遣推進方策についてお話いただきます。以上は、派遣する側の立場をそれぞれに代表です。続いて派遣された側として、まず帰国隊員を代表して、石川県かほく市立宇ノ気小学校の浅香信之先生からご自身の経験を踏まえた提言をお願いします。さらに、都立白鷗高等学校の高橋進先生には、フィリピンの理数科プロジェクトへ専門家として派遣されたご経験から、現職教員が派遣専門家として活躍する可能性についてお話いただきます。

進行手順ですが、まず、自己紹介をお願いします、次に、提起した問題に対するパネリストのお考えをお話いただきます。その上で、フロアから、質問とご提案をいただき、その質問とご提案にパネリストの方々にお答えいただく中で、提起した問題に対する検討を進めることができれば幸いです。

青年海外協力隊「現職教員特別参加制度」 文部科学省の取り組み

野 田 潔

(文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室長補佐)

-
- ・ 文部大臣の私的諮問機関である国際教育協力懇談会の報告（平成 12 年 11 月）において、青年海外協力隊に現職教員の参加を促進するため、文部省、外務省、JICA と連携し、教育委員会の支援のもと、対象を現職教員に絞った特別の制度を設けることが提言された。
 - ・ 平成 13 年 2 月 28 日「現職教員特別参加制度」を創設。
 - ・ 平成 13 年度春募集において、158 名の参加希望教員の応募があり、63 名が本制度の第 1 期生として世界各地に派遣された。
 - ・ 平成 14 年度春募集：応募者数 177 名、派遣者数 56 名
 - ・ 平成 14 年 10 月～平成 15 年 2 月
文部科学大臣の私的諮問機関である国際教育協力懇談会の最終報告（平成 14 年 7 月）を踏まえ、全国 6 ヶ所（札幌、仙台、東京、名古屋、京都、広島）においてシンポジウムを開催し、初等中等教育協力の強化を目的とした教員参加促進に向けての取り組みを紹介。
 - ・ 平成 14 年 12 月～平成 15 年 2 月
神奈川県及び横浜市の教育委員会の協力を得ながら、同県内 10 ヶ所で開催された小・中・高校の校長会において、本制度の広報と教員参加促進に向けての協力を要請。
 - ・ 平成 15 年 2 月～
JICA と協力し、全国の公立小・中・高等学校及び教育委員会に対して、青年海外協力隊及び本制度に関するパンフレットを送付し、教員及び教育委員会への広報活動を実施。
 - ・ 平成 15 年 5 月～6 月
初等中等教育協力の強化を目的とした「拠点システム」において青年海外協力隊の派遣前研修を実施。派遣される隊員の資質向上とそれに伴う効果的な協力の実現に向けた研修を、全国 3 ヶ所（広尾、二本松、駒ヶ根）の JICA 訓練所において実施。
 - ・ 平成 15 年度春募集：応募者数 147 名、派遣者数 64 名

- ・平成 16 年 3 月 22 日
14 年度派遣された隊員が任地での任務が終了し帰国。文部科学省馳政務官に表敬訪問。
- ・平成 16 年 5 月～6 月
「拠点システム」派遣前研修実施。
- ・平成 16 年度春募集：応募者数 165 名、派遣予定者数 84 名
- ・平成 16 年 9 月 17 日
文部科学省初等中等教育局所管事項説明会において、教育委員会担当者に対し、本制度への協力を要請。

最後に、

- ・文部科学時報 2 月号に、本制度の紹介と帰国隊員の手記を掲載。
- ・皆様方におかれては、同僚の先生方に本制度の趣旨等を紹介していただき現職教員の派遣促進にご協力願いたい。

《参考》

平成 16 年度春募集応募状況（応募ベース）

		164 名
		男 65 名、女 99 名(4:6)
		平均年齢 31 歳
職種別	野菜(4)	2 名【うち合格 2 名】
	村落開発普及員(11)	1 名【うち合格 0 名】
	測量(3)	1 名【うち合格 1 名】
	保健師(3)	3 名【うち合格 2 名】
	養護(13)	18 名【うち合格 7 名】
	感染症対策(1)	1 名【うち合格 0 名】
	コンピュータ技術(21)	1 名【うち合格 1 名】
	青少年活動(10)	14 名【うち合格 7 名】
	家政(4)	6 名【うち合格 4 名】
	音楽(7)	3 名【うち合格 3 名】
	日本語教師(20)	9 名【うち合格 3 名】
	理数科教師(33)	23 名【うち合格 9 名】
	小学校教諭(14)	68 名【うち合格 39 名】
	幼稚園教諭(15)	5 名【うち合格 1 名】
	数学教師(1)	3 名【うち合格 1 名】
体育(6)	6 名【うち合格 3 名】	
	※()は要請数	164 名【うち合格 84 名】

JOCV 事務局による推進体制

大塚 正 明

(国際協力機構青年海外協力隊事務局長)

現職教員特別参加制度の創設の背景には、国際協力におけるアプローチの変化による国際協力人材へのニーズの変化がありました。特に援助の効率を高めるためインフラ等ハード面での協力だけでなく技術指導や人材育成といったソフト面での協力を組み合わせて実施するようになってきていたことや、大学等の高等教育機関への協力から基礎教育の拡充に重点がシフトしてきていました。この結果、小学校や中学校へのソフト面で協力がよりいっそう必要となり、日本の経験豊かな現職教員が国際協力に参加しやすい制度を作る動機となりました。また、年々減少傾向にあった協力隊現職参加者の割合を増加させたいという副次的な目的もありました。

現職の先生が参加しやすいように、協力隊参加期間を学期制にあわせて4月から派遣前訓練に参加し2年後の3月に帰国できるようにしたことや、文部科学省からの推薦により1次試験を免除しています。また、他の現職参加制度と同じく、派遣中の給与の8割をJICAから補填しています。

当初1年で100名の派遣を目標に導入した制度ですが、これまでの派遣実績は毎年60名程度と派遣人数に達していません。これは、応募者の3割以上が健康診断で不合格になってしまうことや都道府県によっては派遣人数に限りがあることなどが影響しています。日本での生活では問題ない方もアレルギーや体質などによっては途上国での長期にわたる生活が難しい場合があり、協力隊事務局では特に健康面を厳しくチェックしている点をご理解いただきたいと思います。また、北海道のように10名以上の応募者があるにもかかわらず、派遣枠の関係で隔年2名の派遣しかできない都道府県に対しては今後もよりいっそう理解を求めていきたいと考えています。

途上国の現場では経験豊かな指導力のある先生の存在は大きく、今後も教育分野の国際協力においては現職の教員の方々に大きな期待を寄せたいと思います。また、途上国での活動経験を積んだ先生が、帰国後多くの生徒と接することで私たちの子どもの世代の目を広く海外に向け、視野を広げることに大いに役立つと思います。これからも同制度の更なる改善と進展に努めていきたいと思っています。

横浜市における青年海外協力隊派遣の取り組み

大野 敏 美

(横浜市教育委員会教職員人事課長)

1. 派遣の目的

- ・ 教員の資質向上
異文化理解の向上／問題解決能力の向上／日本・横浜の教育の再確認
- ・ 地域からの国際貢献

2. 派遣者実績

H11・・・6人 H12・・・1人 H14・・・3人 H15・・・1人 H16・・・5人
H17・・・8人（予定）

3. 推薦にあたって

4. 派遣の成果と帰国後の人材活用

- ・ 国際教室への配置 ……48校（小32校、中16校）
- ・ 国際理解教育、英語教育への活用
- ・ 教員研修での報告

5. 今後の課題

- ・ 派遣教員のネットワーク化

(参考)

1. その他の派遣

- ・ 在外教育施設教員派遣
- ・ 国連国際学校日本語指導教員派遣

2. 横浜市在住外国人生徒数 2,172人（内日本語指導を必要とする児童生徒数 621人）

派遣現職教員として参加して

浅 香 信 之
(かほく市立宇ノ気小学校教諭)

現職派遣教員として参加することには2つの役割があります。1つはもちろん派遣国の教育に対して協力することであり、そしてもう1つは帰国後に現職教員として日本に還元することです。特に国際理解学習の面で協力する必要があると思います。

しかし国際理解学習では、アメリカ、イギリス、オーストラリアなどの英語圏に目が向きやすく、途上国は扱われづらい現状があります。多くの先生方にとっては途上国へのネットワークもなく、また英語以外の言語なども障害になっているからだと思います。

そのような現状に対して、ホンジュラスに関する情報をホームページの形でまとめ、子ども達にふれさせる試みを行っています。現地で取った写真を載せたり、地図を載せて実際に歩いているような感覚を味わってもらうなど工夫が盛り込まれています。また、ビデオを給食のときに流すなどして呼びかける努力もしています。

このような試みを行いながら感じたのですが、これから国際理解学習をより推進していくためには次のようなことが必要だと思います。まず1つ目は、派遣される前に同僚に相談するなどして、現地と自分の学校を結んで実践を行うこと。2つ目は、1国だけでなく他の派遣教員ともネットワークを広げ、多くの国々を結んでいくこと。最後に派遣教員は現地で様々な資料を収集し、帰国後に活かしてほしい。ただ帰国後は忙しくなるので、現地で教材としてまとめ上げることも必要だと思います。





本日の授業



ASASEN

先生の話

日本のみなさ〜ん、小学生のみなさ〜ん、
そして世界中に散ばっている僕のお友達のみなさ〜ん
「元気ですかー？」
アサセンは元気ですよー！

このホームページはホンジュラスで青年海外協力隊として活動中のASASEN(アサセン)がインターネットを通してお送りする、特別授業です。

じゃあ今日も先生の話をしっかり聞くように！

ほら、そこの君！目を覚ましなさい！

できごと



10月17日
ホンジュラスの小学生に
日本の援助で
定規セットが配られました。
(写真をクリック)

ASASENは 何をしているの？

ASASENスーパー協力隊
青年海外協力隊とは？
プロメタムとは？

腹へった？

ASASENスーパーコマダ
食べ物にこだわった授業！
ホンジュラスの食べ物とは？

リンク集

ASASENスーパーリンク
地球教室のリンク集だよ。
他の国の隊員や
青年海外協力隊のことも
調べてみよう！



メールはこちらから

↓お便りはこちらの住所へ↓
Sr. NOBUYUKI ASAKA
A .P. No.105 DANLI ,
EL PARAISO ,
HONDURAS, C. A .



ASASENの住んでいる ホンジュラスはどんな国？

ホンジュラス に入門編

HONDURAS 入門編

ホンジュラスってどこ？素朴な疑問にお答えします。

ホンジュラス たんけんたい

HONDURAS 探検隊

アサセンの町ダンリ市を地図と写真で紹介しします。

ホンジュラス しゃんしゅう

HONDURAS 写真集

ホンジュラスの出来事を写真で紹介しします。

ホンジュラス びで

HONDURAS ビデオ

ホンジュラスの出来事をビデオで紹介しします。

ホンジュラス たいざい

HONDURAS 侍日記

ホンジュラスの生活を日記にしています。

ホンジュラス けいばん

HONDURAS 掲示板

いろんな質問・意見をアサセンにください。

現職教員の専門家としての可能性

高橋 進
(都立白鷗高等学校教諭)

自分が派遣されたときの目的は、フィリピンの教員のための全国研修プログラム策定に関わり、その運営から内容まで全てが軌道になるようにすることの支援でした。中等教育の数学の専門家として参加したのですが、現地の数学教員は中等教育でも Mathematics1, 2 担当の教員と Mathematics3, 4 担当の教員というように分かれており、研修プログラムも細分化されてしまいとても1人で扱いきれるものではありませんでした。帰宅後や土日などの休日にも費やさなくてはなりません。また、現地のカウンターパートの人に心を開いてもらう必要があるのですが、これも困難でした。人間関係を壊さないようにすることを心がけ、次第にいい関係を構築し成功に導くことができました。

協力隊のOBの方には、専門家となっていただいて今後も活躍してもらいたい。また、専門家になれる機会を国が提供してあげていただきたい。



ディスカッション要旨

質問(1)

私は健康面には自信がある方ですが、実際、行くと伝染病とかがあると思います。そのような対処はどのようにしているのかを伺いたい。

質問(2) :

身の回りにある情報に気づくことが重要であり、浅香先生のように教師が環境設定したホームページやビデオを利用して子ども自身が取り組むことが大事だと思う。大人がバーチャルな体験を用意するよりは、浅香先生を見て、ホンジュラスという国に興味をもち、多くを自ら学んでいく。とにかく、発信する場所が子どもからであって欲しい。



質問(3) :

現職派遣の教員が現地で何ができるのかを知りたい。自分ができることを知ってないと期待通り活動できない。今までやってきたこととこれからできることを、専門的な話も含めて教えてもらえると事前に準備できると思うのでその点を聞きたい。また引き継ぎがどのようにされているのかも聞きたい。

質問(4) :

今まで小学校現場でも国際理解教育の実践・教材を揃えてきたが、総合的な学習の中での国際理解教育の重要性の理解に温度差を感じる。各先生が大切さを分かっているにしても、優先順位は低い。そういう点の改善に有効な方法があったら聞きたい。帰国後の期待と失望があることが残念です。

質問(5) :

浅香先生が国際理解学習をするとき、せっかくのホンジュラスは含まれず、アメリカ、オーストラリア、中国、カナダが選ばれたと聞いてとても残念に思いました。実際に派遣されていた浅香先生のような、生きた教育のできる先生がいるのにどうしてそのようになったのかと思う。理由として、英語圏、



インターネットでつながることができる、途上国は情報が少ない、など忙しい教員のやりやすさが1番の理由になっているのではないのでしょうか。子どもたちが学ぶ国も教員の都合で選ばれているのだと思った。私が途上国に行って、今の日本の子どもには、途上国からこそ学ばなければと思った。先程の温度差の問題と重ねて、途上国から学ぶべきと思うがうまくいかない現状の打開策なども共有できたらと思う。

質問(6)：

文部科学省では、こういう形でとか、どういうものを還元して欲しいかなどのことがありましたら教えて欲しい。国際協力の問題を生徒に話したり投げかけたりしたいが、自分の自慢話になるきらいがあり、苦心している。

また JICA では現職派遣教員にどういうことを求めているのか伺いたい。同時に、先程の高橋先生のようなことまではできないと思うが、日本で教職免許を取っていた経験を派遣先で参考にして頂けるのかということも聞きたい。

最後に、このようなシンポジウムは、経験者やこれから行かれる人に焦点を絞らず、協力隊に関心がある人にもより広げていくことをお願いしたい。



モデレータ：

シンポジウムは、私も広がってほしいと思っています。還元を実際どのようにしたらいいかという質問は、私ども全員にとっての良い質問だったと思います。またなぜ現職教員が行くのか、現職教員だからこそできることは何なのか、ということも私どもが答えられる質問だったと思います。他に質問はありませんか。

質問(7)：

2年前になりますが、私の県では、小学校から2名行きました。私の場合は代わりに臨時の講師が採用され、校長先生が私費で補ってくれました。もうひとりの方の場合、4月1日から講師の人が代わりに勤務したのですが、教育委員会が2人は同時に採用できないということで、彼女の私費でその講師の給料を補いました。2人は市立、町立などの事情は変わりますが、同じ県内でこのような違いがあり不思議でした。また新しい制度の導入で、せっかく4月から3月までの2年間の派遣期間に変わっていますので、上手く現場に「訓練していきます。よろしくお祈りします。」とお祈りして出られるような環境整備をして頂けると今後も先生方はやりやすいのではないかと思います。お願いなのですがよろしくお祈りします。

モデレータ：

個別の質問は個別にお話しして頂いて、その上で、全体の質問に答えて頂きたいと思います。健康面や紛争、引き継ぎ等の問題について質問がありましたこの話は大きいのですが、

制度上の問題もありますので大塚様からお願いします。また国際理解教育について質問がありました。子どもが気づくことが大切なのではないか、温度差があることや、実際にうまくやっていくにはどうしたらよいのかという質問でした。それらは、浅香先生からお願いします。それから、なぜ現職派遣教員なのか、現職派遣教員だからこその良さは何なのかについてのご質問、どんなふうに還元したら益々派遣を生かせるのかについての質問もございました。それでは、大塚様からお願いします。

大塚正明氏：

まず、ボランティアの健康管理および安全対策に対する JICA の取り組みについてお話ししたいと思います。途上国での環境は日本と大変異なる場合が多いことから、派遣者の選考をする段階でさまざまな点から応募者の健康をチェックしており、日本では健康に生活できる方でも派遣を断念する場合があります。また、現地での健康管理について保健師、看護師の資格を有する健康管理員派遣したり、現地の病院と契約をするなど、現地でもできる限りの対応ができるように努めています。また任国で対応できない治療を必要とする場合は、近隣の先進国や日本に移送する手段も確保しております。

ボランティアの安全対策については、連絡体制の整備や安全情報の収集、非常事態に備えた退避オペレーションなどを実施しております。国によっては、各ボランティアに携帯電話や無線を貸与して連絡がとれるようにし、交通事故や非常事態発生の際は各ボランティアの安全を即座に把握できるように連絡体制を整えています。昨年末、インドネシアのスマトラ島沖地震が起きましたが、このような場合にはできるだけ迅速に各ボランティアの安否確認ができるように努めています。また、活動地域の治安が不安定な場合には特に注意を払い、状況に応じて迅速に国外に退避できるようにしております。

前任ボランティアからの業務の引継ぎという点についてですが、基本的には現場の状況を記述した要請背景調査票によって配属先の状況等を知ることができる他、派遣前の訓練で任国の状況についてブリーフィングを受ける時間を設けております。しかしながら、応募者がタイミングよくおらず、要請から派遣まで1年以上過ぎてしまうこともあり、現地の事情が変わり、要請背景調査票と異なっている場合もあります。このような場合は現地事務所で調整し、必要であれば配属先を変えるなどといった対応をする場合があります。前任者と後任者が直接話をするような丁寧な引き継ぎはできないかもしれませんが、必要な情報等は事務所で把握しておき、後任のボランティアに引き継ぐという方法で対応しております。



浅香信之：

先程、私の交流のやり方についてコメントを頂きましてありがとうございます。でも、私の方は限られた時間の中でこれしかできなかったというように、たいしたことはできていま

せん。私の方でも、できれば日本とのつながりをもっと大切にして、世界の子どもたちが色々な国があるのだと、とらえながら自分たちの身近なものとのかかわりも大切にして、世界のつながりを感じられる、そういう授業ができれば本当はいいと思っています。

もうひとりの方が、温度差を感じるとおっしゃっていましたが、それはどの学校でもあると思います。国際理解教育というのは現実にと考えると自分の身近にあるものではないので、教材を自分たちで探したりするなど、大変なエネルギーがいることです。忙しい教員の人にとっては難しい面があると思います。ただ、還元といいいうふうに考えますと、日本では基礎基本が大切だ、生きる力をはぐくむといわれています。そういう目で考えると現職派遣で、他国の教育現場に立つことで今の日本人にとって本当の基礎基本とは何か、生きる力を日本の子どもにどのように育めばいいかについて考えるいい機会だと思います。その中で今まで考えていなかった大切なことを外国で生活する中で意識できます。日本の良さを感じることができます。これ自体がもうひとつの還元ではないかと思います。それを日本で普通の学級活動や授業などの中で活かしていくことこそ、もしかしたら国際理解教育の中ですぐに行うことであり、よい還元の方法なのかもしれません。しかし、これからの将来において、国際理解教育は大切なことなので、どんな先生方にも活用できるようにネットワークの活用など、忙しい先生方にも簡単に実施できるように環境を整備していくことが理想だと思います。以上です。



モデレータ：

それでは最後になりますが、各々の立場で、なぜ現職派遣なのか、現職派遣だからこそできることは何かについてと、具体的にどんなことを還元したらよいかについて、コメントを頂ければと思います。では野田室長補佐からお願いします。

野田潔氏：

現職教員の良さというのは今まで皆さんが発表した通りですし、またこの「現職教員特別参加制度による青年海外協力隊への参加」という青いパンフレットに書かれていますので、あえて付け加えることはありません。

また還元のことですが、自慢話になる恐れは確かにあると思います。私自身も非常に気を遣った記憶があります。還元の方法については、皆さんは教育のプロですので、個人で発掘して頂きたいし、それが醍醐味でもあると思います。

また先ほどの制度上の話題ですが、4月1日から現職派遣教員は定数外になります。その代替者は義務教育の場合、国庫補助で雇うことができます。詳細は市や県の教育委員会でお尋ね下さい。



大塚正明氏：

私たちが現職教員に期待することは、ボランティア活動の質の向上と国際理解教育の推進です。あまり適切な言い方ではないかもしれませんが、現職の先生方は途上国の状況を国内で伝える際のいい「メディア」だと言えらると思います。現職の先生方は、帰国後子どもたちと接する多くの機会を持っているので、さまざまな工夫を凝らして途上国での経験を広く伝えてほしいと思います。

先ほど高橋先生がおっしゃった通り、教育分野は日本が国際的に大きく貢献できる分野のひとつですが、必要な人材が十分だとは言えません。語学力や交渉力があり、国際感覚を備えた人材をもっと育成していく必要があります。このようなことから、もっと多くの現職の先生方が協力隊に参加し、教育分野で国際協力を担う人材となっただければと思います。

途上国に行き、苦勞して、チャレンジして、いい仕事をしてくれば、それと同じだけ自分が何かもらって帰ってきます。そういった意味で国際協力は決して一方的な援助ではなく双方の利益追求だと言うことができます。このような考え方を国内に広めていけたらと思います。日本では、アフリカをひとつの国のように捉えがちですが、実際はまったく事情の違う国が集まっています。途上国の状況や世界の正しい知識を広めるためにも、ぜひ教壇に立っいらっしゃる先生方の活躍に期待したいと思います。

大野敏美氏：

引き継ぎのことですが、横浜では4月に研修辞令を発令し、7月から派遣辞令ということで4月からは完全に違う教員が入るので個人負担ということはありません。全国的にも同じかと思ひます。

また、現場への還元が話題になっていますが、今は協力隊として戻って来ている人が多くいて、さほど珍しいわけではありません。特別視されることもありません。なので、貢献だと考えるより貴重な経験をし、教員として一回りも二回りも成長してきたことにより、生徒や保護者からの信頼が以前より深くなったことそれ自体が大きな還元であると考えて頂ければと思います。日本全国、国際化という傾向もあり、外国の子どもたちへの対応などで助力が求められるかもしれません。そういう時には協力してほしいが、還元しなければいけないとあまり力を入れることはないと思います。



浅香信之氏：

これから派遣される方も多くいるということで、やはり隊員が1人で頑張っても、つらいことやカラ回りも多いですから、1人で頑張るといふより、仲間とのつながりを大切にして頑張っ頂けたらと思います。今こういう場があるように文部科学省や筑波大学などの色々なバックアップがあるということも私たちの大切な味方ですから、それをこれからも大切にして活動していけたらいいと思います。今、筑波大学では、活動の成果のデータ化やネット

ワーク化などの支援事業をして下さるといふことで、これは、これから派遣される教員にとってはとても心強いことだと思います。これからもこのような活動が発展していき、国際理解教育のプロジェクトが本格的に動いていくのだと感じました。今日は色々とうもありがとうございました。

高橋進氏：

お世話できるうちにお世話しておこうというのが私の考え方です。教員は生きた on going な教材に触れていますし、教育の色々なシステムに触れています。こうした知識や経験を相手に、無理をしないような形で伝達していったらいいと思います。

私は、阪神大震災やサリン事件の時に日本を出て、次の年に日本に帰ってきました。私は上野付近に住んでいるのですが、帰ってきたときに感じたことが3つありました。1つ目は、高校生の態度が大きいこと。2つ目は、大人が逆に元気がないこと。3つ目は、電車に乗ると乗客がピリピリしていることの3つです。これらは日本にいと気づかないことでしょう。そういう意味では外国に行って、苦しいところでもニコニコしている人と触れ合うことで、私たち個人のもの見方が変わるのではないかと思います。ぜひ専門家として行って見て、行ったからといって現地での経験の全てを返さないといけないと思わないで、1つでも2つでもまず自分のものにするとすることを頭に入れて活躍して貰えると良いと思います。以上です。



モデレータ：

皆様ありがとうございました。最後に高橋先生からお話が出ましたが、我々は自分たちが空気を吸っていることは水の中に入らないと分からないということなのです。派遣現職教員の皆さんは大変貴重な体験をされていて、他の先進国とは異なる教育的な価値を追求されていると思います。例えば、どういうことかという、午前中の横山先生の話にもありましたが、日本の子どもが、途上国の子どもの写真をみる。よく見ると子どもに足がなかった。で、それをきっかけに途上国の子どものことを考えることが始まった。このような体験こそが異文化体験です。インターネットライブ授業について報告下さった中山先生の最後のスライドには異文化体験を振り返り、教訓を得ていくことの大切さが示されていました。途上国を生かした国際理解教育には、途上国であればこそなしえる、国内で情報が溢れている先進国では得がたい強いインパクトがあります。そのようなインパクトは異文化体験を語り合った本日のシンポジウムにもあったと思います。今日は教育新聞社さまも来て下さっていますので、全国の皆さんに、是非、今日話し合われた内容を報道願ひ、広く伝えて頂きたいと思ひます。

最後に、派遣現職教員の役割について話したいと思ひます。海外派遣は、学校配属の1種であります。これが最小の仕組みではないかと私と思ひます。国際協力に関するホームページを作って情報発信している県があります。こうした試みにみられるように、国際協力に対

して各県を代表して夢を担っている、それこそが、派遣現職教員であり、日本の教育への熱意を外国でも伝える担い手であると位置づけられます。また国際理解教育の話題もございました。そして、現職派遣を経験した教員の、専門家としての派遣も将来考えられます。私どもは、派遣現職教員支援課題を推進しており、協力隊の派遣前研修などをしておりますが、そうした場で経験を共有することや、また教師教育の担い手としても期待しています。

本日は、文部科学省、教育委員会、青年海外協力隊、現職教員の方々と一緒に、大変いいパネルをさせていただきました。今後ともこういった試みを継続して行っていきたいと思っています。5人のパネラーの皆様、どうもありがとうございました。

閉会挨拶

中 田 英 雄

(筑波大学教育開発国際協力研究センター長)

皆様、お疲れ様でした。皆様のご体験をうかがって大変勉強になりました。ありがとうございました。

皆様のお話をうかがって、途上国で悪戦苦闘なさった貴重なご報告であったと強く感じました。まるきり日本と異なる教育事情や生活事情など身につまされる話がたくさんありました。皆様のご体験から浮かび上がってくるのは、教育という営みは多様であるということです。日本の教育現場の常識が通用しないことが多いということです。しかし、教育という営みには国や文化を超えて共通する要素があります。教育方法の相違点と類似点を日々お考えになったことがご報告の端々に感じられました。着任早々は、相違点にばかりに目を向けがちであったのが、やがて類似点に目が向くようになってきたことがわかりました。思考方法が転換したのです。このような思考体験は、日本では得られません。異国でしか得られないのです。その思考体験の一つ一つが積み重なって、ひとつの「知」を形成しているように思われます。その「知」には、計り知れない価値があります。つまり、「知価」があります。それに気づき、大切にしていきたいと思います。

さて、教育開発国際協力研究センターは、現職で派遣される先生方を支援する役割も持っています。派遣前、派遣中、派遣後の先生方をどのように支援したらよいか、現在検討しています。派遣中に教育上の困った問題に直面したとき、教材開発に行き詰ったとき、その他の教育上の問題が生じたらセンターへご相談ください。専門のスタッフが助言いたします。また、教育場面で遭遇したちょっといい話もお知らせください。今後の支援活動に活かしていきます。センターは、現職派遣教員の皆様が安心して途上国で任務を遂行できる支援システムの構築と関係者間のネットワークの構築を目指しています。本日の皆様のご報告を参考にして、充実したシステムの整備を図り、応援してまいります。

最後に、皆様方のますますのご活躍を期待して、私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



資料

1. 拠点システム国内報告会用課題の概要

派遣現職教員支援課題 ーネットワークの形成による支援方法の拡充ー

課題代表 磯田 正美

筑波大学教育開発国際協力研究センター

本課題では、現職教員特別参加制度による青年海外協力隊隊員として派遣される現職教員に対して、蓄積された経験や協力モデルを伝達し、開発途上国での活動経験の浅い現職教員を組織的・体系的に支援することを目的としている。

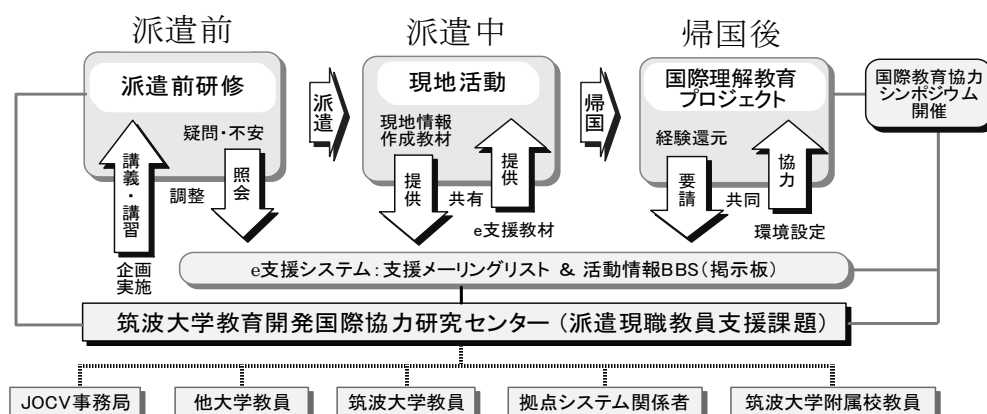
本課題では、以下3つの局面を推進している。

第1が、活動準備として派遣現職教員の専門性を向上させるための講義と演習、実習までを含めた派遣前研修の実施である。本研修は、派遣中の隊員に対するニーズ調査による活動情報の収集及び分析を前提としている。また実施後、受講者アンケートに基づく反省と共に、研修用教材として集約している。

第2が、派遣中の教育活動ニーズに応じた教材教具の開発や、支援メーリングリストと活動情報掲示板(BBS)を基盤としたe支援ネットワーク形成による現地情報や個別開発教材、経験、教訓の提供である。例えば、本年度は関数グラフ描画ソフト GRAPES の英語化、スペイン語化と実践事例集や、日本の教育経験に関する指導資料の翻訳、教材リンク集等を開発し、成果として集約した。また派遣現職教員の活動成果は、アーカイブスへの登録を通して共有される。

第3が、帰国後に、現職教員がその活動経験を活かして日本と現地を結ぶインターネットライブ授業や異文化体験授業の実施など、日本の教育現場に経験や教訓を還元する場を拓げる国際理解教育プロジェクトの推進である。プロジェクトにおける各取り組みは、モデルケースとしてアーカイブスに成果として登録される。同時に、途上国における派遣現職教員の活躍を広く発信するための国際教育協力シンポジウムを実施している。

本課題における支援は、国際協力機構・青年海外協力隊事務局との協力の基、進めている。



international



派遣先のニーズに合わせて活動を工夫

派遣先のニーズに合わせて活動を工夫... 派遣先のニーズに合わせて活動を工夫... 派遣先のニーズに合わせて活動を工夫...

派遣先のニーズに合わせて活動を工夫... 派遣先のニーズに合わせて活動を工夫... 派遣先のニーズに合わせて活動を工夫...

派遣先のニーズに合わせて活動を工夫... 派遣先のニーズに合わせて活動を工夫... 派遣先のニーズに合わせて活動を工夫...

独立行政法人国際協力教育開発国際協力研究センター主催... 派遣地での活動を報告

国際教育協力シンポジウム

派遣地での活動を報告

開発途上国に基礎教育の支援が重要

派遣地での活動を報告... 派遣地での活動を報告... 派遣地での活動を報告...

派遣地での活動を報告... 派遣地での活動を報告... 派遣地での活動を報告...

派遣地での活動を報告... 派遣地での活動を報告... 派遣地での活動を報告...

派遣地での活動を報告... 派遣地での活動を報告... 派遣地での活動を報告...

教育新聞

発行所 教育新聞社 東京都台東区上野3-17-1 代表 03(3832)3571 FAX 03(3832)3571 URL http://www.kyobun.co.jp E-mail kyoku@kyobun.co.jp 購読料 2625円 振替口座 00170-6-4369 教育新聞社 2005 週2回 月・木発行

4月16日 国際理解教育でセミナー 名古屋国際センターで 国際教育交流促進協会などが主催する国際理解教育セミナーが4月16日午後4時から、名古屋市... 田仁康助教授が多文化理解などの問題をテーマとして講演するほか、実践校の教諭による事例の紹介、ニューシールド観光局による教育素材の提案などが予定されている。参加費用は無料、定員は30人。資料請求は国際教育交流促進協会/TEL03(3257)8568。

3. 日本教育新聞記事 (平成 17 年 1 月 21 日付)

平成 17 年 (2005 年) 1 月 21 日 (金曜日) (毎週金曜日発行)



中山教諭の助けを借りてカンボジアの子どもたちに向けて自己紹介

ネットライブ授業

海外派遣体験を生かす

カンボジアの教室と結ぶ

現職教員が開発途上国の学校に赴いて授業を行う国際教育協力をテーマにしたシンポジウムが六日、文部科学省などが主催して東京都内で開かれた。その中で、日本の小学生とカンボジアの小学生の間で、インターネットライブ授業を実施した事例が報告された。青年海外協力隊として教員が海外で得た貴重な経験を、ITを活用して日本の学校現場に還元する取り組みだ。

文部科学省では国際教育協力の一環として、JICA(国際協力機構)と連携し、現職教員を途上国へ青年海外協力隊として派遣している。現職派遣教員として昨年度、カンボジアに赴任した中山晴美教諭(帰国後)も、今年度は、長野県小



創刊 1946(昭和21)年5月1日

発行所

日本教育新聞社

〒105-0001

東京都港区虎ノ門1-2-8

電話03(5510)7777(大代表)

郵便番号 00150-8-196500

○日本教育新聞社 2005

03(5510)7828

http://www.wkyoku

press.co.jp

ホムシ

ホムシ

9 8 7 6 4

解説 中教審「教委制度」小田正人氏

保護者支援「保育の現場から」

保護者や地域が外部評価

「満足度」切り口に指導改善

カンボジアとインターネットライブ授業

今週の紙面



長野・小諸市立美南方丘小学校で
長野小の中山教諭

が大事」(中山教諭)として、昨年十二月二十二日、インターネットを利用したライブ授業を実施した。同校の五年生とカンボジア・パタンバン州のワットカンベン小学校の五・六年生との交流授業だ。クメール語の通訳は日本側が中山教諭、カンボジア側が現在、同校に派遣されている隊員が行った。

第一回は、自己紹介と互いに知り合いを質問。プロジェクトに映し出された相手に向かい、「どんな遊びをしているの?」「クメール語で言われてうれしい言葉は?」などの問い掛けが交わされた。向こうの「日本の経済が繁栄しているのはなぜですか」という質問には、子どもたちが顔を見合わせ、「え、どういう意味?」「日本って恵まれているの?」と目を丸くする一幕も。来月の二回目の授業で、互いの質問に回答する予定だ。

中山教諭は「顔と顔を寄せ合い、話し合う機会に触れることは、子どもたちの課題を見つげるとともに、今の自分たちの姿を問い直すきっかけになるのでは」と話し、交流のスタートとしてライブ授業を実施することの意義を話す。

共有化に向けて
ワットカンベン小はインターネット対応の設備がないため、JICAのカンボジア事務所に移動しての実施となった。機器のセッティングや、現地との交渉を支援した筑波大学教育開発国際協力研究センターは、文科省が進める「初等中等教育での途上国との協力強化を目的とした「拠点システム」の中核センターになっている。

拠点システムは教員の派遣だけでなく、派遣の前の研修や帰国後のこうした取り組みの支援も担当。派遣教員のメールリクエストや活動情報の電子掲示板などITを活用して、教育協力経験の共有化を進めている。

小原豊・同センター産学官連携研究員は「今回の報告は、教員の海外での経験を生かして、両国の子どもたちをつなぐ授業のモデルケース。こうした事例も電子アーカイブ化して、教育協力関係者の参考にしてほしい」と話している。

4. 速報つくば（平成17年1月26日付）

速報つくば



Staff Bulletin, University of Tsukuba

2005

02



2005年02号（通巻1094号）

発行：筑波大学

編集：総務・企画部

発行日：平成17年1月26日

「開発途上国における現職派遣
教員の活躍」シンポジウムが
開催される
—文部科学省、教育開発国際
協力研究センター主催—

文部科学省国際教育協力のための拠点システム事業「派遣現職教員支援課題」を推進する教育開発国際協力研究センター（CRICED）では、文部科学省と共催し、国際協力機構（JICA）青年海外協力隊（JOCV）事務局の協力を得て「開発途上国における現職派遣教員の活躍」シンポジウムを1月6日、東京キャンパスG棟501教室にて開催しました。

参加者は派遣現職教員、協力隊員、大学関係者を中心に152名でした。開式では、文部科学省井上正幸国際統括官が派遣現職教員特別参加制度への期待を述べ、JICA松岡和久理事は制度及び派遣教員に対する謝意と基礎教育分野における協力の必要を述べました。

シンポジウムは3部で構成され、第1部では、エクアドル、ザンビア、セネガル、パラグアイ、ブルガリアからの帰国現職教員が任国における活動を報告し、文化の違いを乗り越えて職務遂行した現職教員ならではの活躍ぶりを知ることができました。第2部ではカンボジア・バットンバン小学校と長野県小諸市内の小学校を結んだインターネット利用による国際理解教育事例が報告され、帰国後の活動の広がり示されました。第3部では文部科学省国際協力政策室、青年海外協力隊事務局、教育委員会、派遣現職教員、派遣専門家をパネリストに、派遣の一層の推進と、派遣経験を帰国後に活用し得るようにするための方策が話し合われました。

文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウム
「開発途上国における現職派遣教員の活躍」
主催 文部科学省、筑波大学教育開発国際協力研究センター
協力 国際協力機構（JICA）



主催者代表挨拶をする文部科学省井上正幸国際統括官

討議の締めくくりでは、教育開発国際協力研究センターは、文部科学省、教育委員会、国際協力機構を結ぶハブとしての本学教育開発国際協力研究センターの役割の重要性と、派遣現職教員の派遣前・派遣中・帰国後の支援とネットワークの強化を表明しました。

教育協力のための拠点システム
平成 16 年度国際教育協力シンポジウム
「開発途上国における現職派遣教員の活躍」

2005 年 2 月発行

代表者：礪田正美（CRICED）

編集：小原豊（CRICED），青山和裕（CRICED）

発行：筑波大学教育開発国際協力センター

文部科学省教育協力のための拠点システム構築委託事業
現職派遣教員支援課題

〒305-8572 茨城県つくば市天王台 1-1-1

電話 029-853-4742

印刷：前田印刷株式会社 筑波支店

〒305-0033 茨城県つくば市東新井 14-3

電話 029-851-6911